

鐘は上野か
浅艸歟

花雲佐倉曙

作者 佐久間松長軒

星田本城の段

其操正しき松も兄に、たとへし梅もそれあらで、花の名にあふ皇君の代
代經て萬治二ツの秋、總州佐倉の本城に、家老杉山彈正を始とし、高石
徳島田中の銘々、胸に一物有磯海我慢の波風高低の座並繕ふ斗々、丁役
田中惣右衛門出かし顔み進出、先達てお仕置に相成し、坪屋五兵衛、某が
計略をもつて升座の證文偽筆謀判の工夫、味ふまいつたでいござらぬ
かく、まだ其上に算盤秤疊天秤棒の運上迄取上、百姓めらをせたげる
も、是皆彈正様のお差圖と何があ笛を福住平馬しやくり出、調彈正様
の御威勢るせいハ又格別殿上總之助様かまくら在番のお留主といひ、忠義立

する奴原のぶのみあ遠ざけ。誰憚らぬ密事みつじの相談、これが則天上ぬけと申物でござりませふと、ござる惡氣も鏡かがみにへぐもらぬ影ぞうたてけれ。杉山彈正だんじやうをつばに入いり、實各じゆかくがやさるゝ通り、百姓に課役くわくえきをかけ、運上うんじょうを取上とり、金銀を貯こねへるも、まさかの時の軍用金元某もとの赤松満祐あかまつまんすけの落胤らくいん、星田家ほしんだとい遺恨ごんの中、術じゆを以て當家へ入込いりこ、かく出頭でとうと成殿なむらに放逐ほうちくを進め心を迷はし、星田に傳つたへる一萬町の墨附すみつき、まつた女龍丸めりゅうまるの劍けんとくお奪だつひ置おきたれば、遠からず殿だんへ自滅じめきさすれば國家こなの身共みきみが一脊いっせきあへよくペ管領元氏始はじ鎌倉殿かまくらだんを幕下ばくしたに付ん我大望おほのぞき、嬉うれしや悦えばしと謀叛ぼうはんの幸先欲心こうせんよくしんの增長ちよせんとこそ見へにける、折から門内もんないがしく下れくの聲高こゑたか、支さへる足輕步仲間あし退のつき退大勢おひきが、お願ひ願ひと無理無躰むりむたい、御前間近く、込入こいりば、徳島勘解由目に角立かくたつテ何やつあれバ、御家老杉山公の傍前共恐れず、立されいで尾籠びのう千萬せんまん、扱あうねらひ、臣領分の百姓よ、土民風情どみふうけいのざ

まをして、願ひとへ何事、願ひ有べ役所へ出よ、身の上知ぬうづ止め、する
れ下れとかさ押の、權威につのめ立騒ぐ百姓共へ口々に、私共の星
田様の涉領分の百姓でござりますか、去年の御年貢二割増、まだ其上に
諸道具の運上迄取上るとの事、是れ十方をあいお上の云付、これで何の
下ぐが立物かと、二百二十九ヶ村が寄合て、段々お願ひ申ましたが、お
役人様の仰み、鎌倉の管領とやらはんれいとやらいふ人から、印幡沼
の御用に付、大そうある渉用金仰付られ、それ故お上にいきついに物入、そ
こで殿様にも其割内がかりりますげ、よつて今年へ何でもかでも増
年貢へ出さにやあらぬと、無理やりに往生すくめ、う皆の衆ソレ、其鎌倉
のはんれいが云付あら仕方もまいと涙を内へこぼして、去年の年貢へ
納ましたが、また今年も二割増陶りせまいかたまげまいかゝ彦三、イキキ、村
村へひつくり返して、大騒動、今年へぞふやら實のりもよし、去年の取返

じが受けふかと樂しんだ甲斐もあい、こんあ事が又ねとかと淺草の觀音様も知りや仕やませぬ、^{ノウ}與茂九^ミ、北の村の庄屋殿が云るゝ通り、^{モフ}此うへ、家も田地もふり捨て、他國へ行ふ外、致し方へござりませぬ、うち共のお願ひには、二割増の義^ハ幾重^スも、おゆるしひ免と惣^トが、涙交りや腹立交り譯も差別も詫口のお願氣^{ハシマツキ}を實^スある、高石豊後大吉に怒り、^{トコロ}土龍^{トロ}の分際^{ハシマツキ}で、浮家老職の目通り汚^{ケガ}すさへ有に、高聲^{カウシキ}に罵^スるアノ爰^ハ、土ほぜり、此程^{タク}一度^{タマ}役所へ願へど、お取上あき殿^{ヨリ}の上意^{シナニ}、取上る事罷^スあらぬ、達て願^{ハシマツキ}ぬら一^ミ牢内^{ラウ}につあざ置^ス、火水^{カクミン}の拷問^{カウモン}、それでも二割増の義、不承知^ス、殿の上意^{シナニ}を背く不届^スき者^ヲ、返答^{ハシマツキ}せよ土民めとてつべいひしきの一言^モ、負^{ハシマツキ}ぬ地頭^{トド}の百姓共^{ヨリ}、豊後殿、何ば其様^ス云^{ハシマツキ}玄^{モシ}やましても、喰事^{ハシマツキ}が出来にや餓^{カフ}へて死ます^{ハシマツキ}いいのふ、死だら定めてこあん方^ヲ、無本望^モでござんせふ、いつそ殺して下^{ハシマツキ}玄^{モシ}やませ、死たふござる死たいと、土

邊へ小喰付泣涙、早稻田の跡の落し水破れ案山子の破れ笠、破れかぶれと
見へにける。道の彈正困り顔、歎して見んと詞を和らげ。百姓共^ヲ扱惡
い合点、民^ハ國の基^といへば、殿有ての百姓、百姓有ての殿。あらずや、殿の
は身體^ハ不自由、あらば、百姓^ヲ貢^ハ理の當然、それに何ぞや、杯^の應^ハのと
理屈^ハなる^ハ國恩^を知ぬといふ物、何とそふで^ハ有まいかと、間に合理屈
に百姓共^たるむ所へ持込で、とかく國恩^くと國恩^{づくめ}に銘^よがく
ろ^まされたる傍辨^{わべん}に、ぞふやら拍子^{ひよし}抜目^{ぬき}あき千葉の庄屋^が引取て、何ば
其様にいひ曲^{まげ}て、殿の^お爲とおしやりますが聞バ鎌倉の^お上のやしき
で^ハ、端手^は遊びさつまやります^せ、百姓の物を一ぱい取上て、上の^費
ハ誰が仕ます。國恩^びかしにやり付ふと、云志^{やまし}ても、それへたゞぬ
もふ此上^ハ村^よが談合して殿様へ直願^ひ跡^で後悔^さしやますと、口か
ら出次第云々、と云はやし、わめくやらばやくやらけつまづ

くやら轉ぶやら押合へし合百姓共村くさして立歸る跡よ彈正大欠
び百姓めらをすかしても、いつかある喰ぬ今云分併鎌倉中と弓引んと
思ふ程の某が鐵石心百姓如きの詞を用ひ思ひ込だる我一心變心更に
あし猶此上へ殿をたらし放擣だじやくの身とあさん鎌倉やしきの一
家中、大半味方に付たれべ、本望取出るれ暫時の内、其時こその旁も、大名
小名思ひの儘、試に裝束と、取出す綾の二重鶴是や赤松代の紋霸王
の勢ひかり衣に、結び留てる露の糸玉と欺く其粧ひ、取出す雌龍の一振
も、時に取ての羽翼の臣、高石徳島一味の武士、詞拗へて聲高く、勇まし
き浮出立、此儘にて下城あし、ひやしきにてひ密談、いしくもやせ
し旁も、俱に下城と先に立、雲井よ羽をのす大鷦の、心の爰に顯せど、見へ
ぬ月日や、星田家の、城外さして「出てゆく

蔣門山の段

佐倉領内村上の老若男女わかつちあく將門山の絶頂より籠の里へ下に及
ばず谷上迄も残りあく馳集りたる數萬の百姓てん手に竹鎧擣^{たた}熊手思
ひくの得物をさげ早打立ん其勢ひ上を下へとかへす聲物すさまし
く聞へける強訴^{がうそ}の頭取瀧澤村六郎兵衛進出^{ごじゆく}こあた衆^アもうそつ
としづかよさつ玄やれぬかいのふそふわやく云ていとんと極りが
付ぬへいのマア何で有ふと人數を分て^{わかれ}鬚^{ひげ}目に村上の印を付紛れぬ様^よ
せねばあらぬ得てこんあ時代^{トキ}そろぼうやかたり者が入込物玄や程に
隨分氣を付ねばあらぬぞやシヤよでんすへいのミ^ミまだ云ねばあらぬ事
が有重立た者^{おも}さし置て若い者が出さべる事ハあらぬぞやたとへ役人
がその様にいふて來ふと鎌倉のほやしきへ直訴する迄ハ一足も引事
ハあらぬぞやシヤ合點じやハいのまだ有^ハ六十以上と十五以下とい
一人も出る事ハあらぬぞやシヤ承知じやハいの併是から鎌倉へ行とい

ふても十三里の道つがすばでも行れまい皆用意のよいかやシヤ呑込で
居るへいの、モカふ成たら直訴して、お願ひが叶へばよし、叶わぬ時の百
年め、日頃憎いと思ふて居る、役人めらをたゞ殺し死より外へあいわ
いの、何と皆の衆、そふじやあいかゞ、そふ共く、モウ斯成からへ生ても死
でもじや、イヤ又かふ皆が出てくるから、かゝや子供に生別れの盃迄し
てきたから、赤練氣アラシガいちつ共あい、モジくそふ大勢の腰ヒダがすりつたりや
みぢんも氣遣ひへあい、時にかふあらんだ大庄屋の中、岩橋村の惣五郎
が見へぬであいかゞ、どちらもどんと氣が付あんだ、此騒動に出て
こぬへ、腹いたでも發つたか、但し分別有ての事が何ぞ譯の有そふある事
じや、三ぶ殿、いか様のふ小原村の半十郎が云るゝ通り、大庄屋仲間七
人の内、年頃といひ、智惠才覺、何一つ抜目のあい惣五郎あれど、悲しい事
か、近頃のかたが悪ふて不仕合夫故ろくくに勤もせられぬが、こんあ

時出いでいつ出るのじや、早ふ来て、一所に行ぬか、何でこんのじやあせ
こぬと、一人がいへば大勢が、わめき立たる折こそ有、惣五郎さぶろうハ只一人走
る共あく麓ふもとの道來かゝる姿を遠目とおめ見付みつけ、惣五郎やいへく惣五
と呼立れバ漸ゆくにたせり付つけ、是へく大庄屋の衆、村々の衆も済くろう
でござるのと、挨拶あいさつすれば六郎兵衛むつらべや、惣五郎、は苦勞所くらうしょじやあいわい
の、夕部からの大騒動聞ぬ事も有まい、又そちの村の衆もきて居るよ
あた一人納つた顔して居るハ何事、役人に一味か、但し又、鎌倉へ行のが
こわいか、外に深い了簡わからんでも有ての事か、レレふでござるくと、大庄屋
諸共惣々さぶるさぶるが寄たかつての詞詰、落穂拾おちのほひの村雀すずめ薙なぐ田見付みつけし如くあり、惣
五郎騒さわぎがす打點うちき成程なるほど大庄屋衆の云分いふぶん一應おおひきハ尤よじやがよふ勘辨かんべんして
見や志やれ、今度の騒動さわぎハ年貢とねりの二割增ふたぱくぞうまだ其上に、道具の運上うんじょうも堪忍かんりん
してもらふといふ願ひでもいか、尤殿様の仰おほどのと有あるどもし家老共かろうの工くわみ

で中はからひで有ふやら知ぬで、あいかいの。ナそれじやよつて、殿様へ直訴するのじやないの、ナ、そこじやての、どこじやての、ナ、殿様へ直訴してお聞入のあい時、あのかき、蓑笠竹籠で行ねばあらぬ、まだ譯も知ぬ内、竹籠ざんばい早いく。網もし此騒動が鎌倉へ聞へて管領家々捕人の衆が來て、何角あしよつれて逝いざなれたら、殿様へ直訴へ拵置、大勢の者が長のお咎めとがめ、ヤ、そふ成たら一も取らず二も取ず、爰が思案の仕所じやての、シテ其思案ハぞふじやの、ハヤシ思案ハいふて外よりあいが、ヤ何かなしに多人數ハ一旦村マへ引取てひとつそりと跡での相談ハざすれバ強訴ハ咎めとがあい、死る命ハ一つあれど、大勢に難義がかりりや大勢の命ハそこを思ふて留るのじや、ハせく所で、あいわいの、義によつたら命ハ芥あくアノ唐からの紀信といふ人ハ、車に火をかけかか焼やれても、一心變へんぜぬ義ハ同じ事、爰ハ大庄屋衆に打任せ、一先村マへ引取て、吉左右を待つしやれど、道も有義理も有、

見立に會し運業の濁に染ぬ心にて玉を見るさへ潔き、云ねぞ遠岩橋の
惣五が詞ぞいさましき。大庄屋共も感心して、いか様惣五郎の云るゝ通
ト、一旦爰を引取て跡での相談、シダガ捨置れぬ年貢のさいそく、成ふ事あら
かふ寄た衆の中で極りが付てそらひたい。皆の衆、そふ共々、それ
でこちどらも落付ます。折角女房子に暇乞迄して來た物無手で逝で
曲があり、極の思案を惣五郎殿、ごふぞお頼みやすす、頼む、くと口ごよ
ひら轉まれに惣五郎思案を定め、其様に頼むくと言れいでも、こち
らが身よりもかゝつた事じや、ア高が斯じやあいか、大庄屋といへば百姓
の惣頭瀧澤、高野、千葉小原下勝、瀧野、岩橋村、此七ヶ村の頭分が鎌倉のふ
上やしきへ願ふて出て、國家老の言付か、但し殿様の仰か、若殿様の仰あ
らば、何べんも直訴して、行ぬ時の工夫へ様々、臨機應變割てへ云ぬ何分
此場の引取りやしやれと、胸より納る大丈夫、百姓共へ口よに成程く、頭

立たる大庄屋殿、それでちつとへ落付ました。皆の衆逝ふと百姓共思ひくの別れ路に残るゝ誰が身の上共知らず玄られぬ大勢がいざや出立の一打と勇、手拍子、足拍子、力足踏勢ひよ鎌倉さして「行空の

上屋敷の段

爰に鎌倉の上屋敷星田上総之助が館に、酒肴を好み歡樂に民を哀む心あく満れべかくるのあらひにて、臣惡の業と知れけり、そうち片手に奴共一ヶ所又高唱し、ナント有助、朝晩渋門前のはきそうち、うち共が役まへとい云あがら、足も腰をたまる物で、あいかいやい、成程駒平がいふ通り、盈も正月もわんぼう一枚、二合半の盛切飯、おつかひ番だのそりやお供だのと、酢にも粉も遣へる、一ぱい機嫌の山下ぞめき、ひやかし數の子もくられねへとけつかるゝ、そふだく、それに引かへ此おやしきのほ殿様の、日があ一日つかりづめ、藝者舞子の色摘へ仕たい事し

て樂しむといへ何たる果報^{くわいほう}を生れ付、是を思へばおら共は、志つかい土龍^{うどりゆき}同前だ、イヤ其土龍で思ひ出した、此間からほ頒分^{はれんぶん}の百姓共が、何か願ひの筋が有とて、毎日くの渉門訴^{せうもんそ}、ほうり出されても、おし出されても、志よふこりもねへ土はせり、渉取上^{じゆとりじょう}がねへかして、今よ譯^{わけ}が分らぬへ、又けふもうせるで有べへ、去迫^{いのづか}面倒^{めんどう}だ、百姓共が來ねへ内^{うち}部^ぶ家^やへいつて一休みせふで、有まいか、よかるくと打連^{うつづ}て、三文をあい一文奴^{うぶ}、部^ぶ家^やくとして急^{いそ}き行^{いざな}、賞^{たんじ}あくして死を顧^{かのむ}ざる一心金鉄^{きんてつ}の如くある、岩橋村惣五郎^{いわはしむらそうごう}其外六ヶ村の大庄屋^{だいじや}、日毎の門^{もん}訴^そ取上^{じゆとりじょう}あき押付^{おしつ}願ひしはくと、ほ門前^{まへ}よさしかゝる、千葉の忠藏^{ちゆうざう}玄^{くわ}はれ顔^{おもて}、めいくが打崩^{うち}ひ、毎日くの願ひ訴訟^{せうせう}も、をふぞお殿様^{おどや}のお耳^{みみ}に入たら、まんざらかふでも有まいと願ふて見ても何の其矢^{そののの}も鐵砲^{てつぱう}も通らぬへ、皆の衆^{こうしゆ}をふした物で有ふあと、投首しての思案顔^{しわんおもて}、三郎兵衛打點^{うち}き^く、いか様^{いかさま}千葉の云るゝ通り、

幾度も追返され牢へ入ぬ斗のきびしい禁め根も息も切ぬ斗、これで命も續くまいと一人がいへば銘ひがいくが、目と目見合せとつおいつ、心へそふじや泣顔を、見せぬ斗ぞ、不便ある、惣五郎顔を上上上納、ふがひあい皆の衆多人數うぶを取鎮とづめ、受合て來た我わが、五度十度追返かへされても、一念通さぬ其内うち、いつかあひるまぬ我性根、此上行ゆきずば工夫こうへ様よう、とかく我等又打任せ俱とも願ふが上分別よそのべつ、門へと立かゝり、詞乞ことねづかゝ聲こゑ拗あどへ、私めらわらの汚領分の百姓共ひきど、恐れあがら殿様だんさまへれ直願ひ先達しょだつて、度たどる度たどる罷出はりだしませれど、門内うちへ叶かなぬと有て、追返されましたれ共とも、恐れ多くも押おてのふ願ひ、何とぞ、汚聞届うわきみと下さるゝ様よう偏へんに願ひ奉る汚門訴訟うわもんそうぞといひ入ける暫く有て取次の侍罷出しもく領分の大庄屋共ひきど、此間うち一度いちどの願ひ、殿だん聞きし召めしれ汚意ういを背そむく不屈ふくき者ものと有て、以ての外のほか怒いかり、此上押おて願ねひ、一召捕禁獄さんごくせよとの仰あが、早く汚門うわもんを下くだればよし、左あくべ下部しもべに下くだ付つけ妻まご

子從類牢舍の咎め、それでもやめぬか、下らぬか、成程仰せ涉尤夫あが
ら、佐倉十八石石の領分、残らず非命に及ぶ時宜ハラお聞入るき時にた
とへ命を召るゝ共、ちつ共いといぬ、せひふ聞入有迄へ、いつかあは門へ
止りませぬと、思ひ切たる七人が、詞み、道役人も、もて餘してぞ見へよけ
る又も出來る立派の武士、美々敷大小役目の威義、玄づくと立寄、其
方共身ハ池浦主計とナ者、此度増年貢、并に運上の義に付、遙との出府太
義千萬去あがら承れべ、此程、殿へ度々直訴訟、又今日も押ての願ひヲ拵
悪い合點、大小名よかゝらず、皆それくに役人有、國にハ國の役人有
夫をさし置直訴致すハ法にあらず此理を辨へそち達も得と勘辨いた
せよと、慈愛を籠し一言、惣五郎進出、池浦様とやら、お慈悲あ仰、涉尤で
ハござりますれど、國元の家老始、役人衆、いか様よ願ひましても馬
の耳、風吹の高燈籠、ぶら／＼しても居られぬ譯、二百二十九ヶ村の、百

姓共が寄集り、暇乞の盃やら、鋤の、鍔のといふ所を、大庄屋共が取納め、そ
ふやらかふやら、納得させして鎌倉行きて見れば案の外、お殿様よりは遊
興の舞諷ひ、鎌倉誥の役人に、取次頼む人もあり、詮方あさの御門訴、元
々命へ捨物と、投出しての此お願ひ、殊に只今の傍一言、あまへました事
ながら、何卒お殿様のお取上有様よ、お頼み申上まする、皆の衆も其通
りかゝ、アレく傍らふじて下さりませ、誠に尻かあたまやら、知ぬ様にしてお
ります、どふぞお慈悲に私共の願、お開局遊ばして殿様へのお取次偏に
願ひ奉る、二百二十九ヶ村の命の親共存じます、ヨリ、お情お慈悲と手を
合せ、詫つかこちつ七人が、取縋泣あら涙時雨もて來る武藏野の原にも
余る思ひて、池浦も不便さの、増る心を取直し、百姓共が願ひを聞べ、殿の
上意を背く道理、ハテ巡ふがあと當惑の、思案を定め詞を正し、善惡不二と
申すがら、悪の惡、善の善と鏡にかけあバ天の照覽、先今日ハ立歸り、とく

と勘辨いたせよと、主計が理解に大庄屋共、ハッ、とへいへと立兼る、役人共に制せられ、立に立端の泣顔をそれとい云ねど岩橋の、惣五郎目くばせし、六人を無理に引立て、心へ爰々沖津浪沙風誘ふ小網町、憂世渡りや身にまどふ吳服橋とい中宿の、小傳馬町や博勞町、末亥ら雲の、わかれ道、宿やへ「こそへ立歸る

宿屋の段

武藏野の、はらの、草木も世につれて、吠あびきたる秋津風、尾花へ枯ても冬枯をせぬ故花のお江戸とい、呼あらはせし物あるか、爰に下總の佐倉領、七人の大庄屋が、村の難義を引受て日毎の門訴取上あき、あぐみ果たる寄合も額に玄へす押詰る小網町の、仮住居、いとい淋しき冬の空、勝手を出る下女か鍋、世間知ずの高はあし、ヨン三介殿、何とア寒い事でへあいかいのふ、ヤイ此江戸の風が荒吹ので、からへよつ程冷もでつかいとい

へべお鍋へ、何ば冷てもこちや苦にやあらぬやんがて正月又成たら、
數入に歌舞妓芝居を見にいくれいあ、べくおらへ又歌舞妓へきらひじ
や操芝居が面白い、こちや歌舞妓がふもしろい、傀儡芝居がふもし
ろいと疊叩いて争ひもひいきぐと知れけり、折から表へとぼくと
年も六十の旅僧が網代のかさに頭陀袋杖つくぐと打詠め、慥に愛と
内に入、歎きやれ、愚僧へ下總の佐倉から参つた者岩橋の惣五郎
に迎然が來たといふて下されど、いふ聲聞て惣五郎跡又續て半十郎忠
彌伊兵衛も立出て、是へくお珍らしい何と思ふて伯父涉坊、是へに
老僧ハ草鞋脱やら甲挂の紐解合た、眞身の挨拶、構ふて下さるあ
女中、年寄と紙袋のつめねばあらぬ支度をばせふぞ頼みますといへば
お鍋へ、お荷物お笠も奥の間へ、直にあをして置ます。トヤお支度を
と立て行跡又迎然小聲に成、ア何より角より聞たい、彼一件のぞふ成ま

したの潔い人の志皆の衆に如才へあけれど、若後指さされぬせまい
かと、年寄のくせゝと、爰で案じて居よりはと、供をもつれぬ忍びの
旅、早ふ様子が聞たいと、者のいらぐら問かくれべ、^謂伯父涉坊のお心
づかひ、何からか咄しやさふやらぐあなたをか達者で、村の衆も皆無事
で、野業もいたされますかあ。毎日、く七人の者共が、いひ出さぬ日迎へ
ござりませぬか何をやも今の身の上、狀文通^うも世間を憚り、ぶ沙汰の段へ
幾重^{いく}みも、ア、^{ヨシ}惣五郎、おりやそんあ云譯^ハ聞に來ませぬ。こあた衆^ア
鎌倉へ發足^{はつだき}の其時、此願成就^{じやうじゅ}する迄^{まで}、在所へ迎へ戻らぬ、便もせぬとか
ない誓言^{せいごん}、國隔ても心ハ一ツ、餘り便がない故に、若皆の衆が心にたゆみ
も出よふかと、案じ過して尋ねに來ましたと、いへば惣五郎膝^{ひざ}を寄^{すま}是^ハ
又伯父涉坊のお詞共覽へませぬ、七人の者共ハ、命を的^{まと}の今度の一條^{じょう}誓^{せい}
年月經る迄も、いつかあ變ぜぬ鐵石心^{てつせきじん}、お氣づかひあれますを、こふが

玄やうりに成ても、やり付てお目にかけませふといへば傍から半十郎。
ミレ惣五郎殿これ迄幾人共あふ替る役人衆、昨日出や玄やつた池浦殿が
云玄やつた詞の端いかよしても合點が行ぬ又無理にわしらを引ばつ
て戻つたこあたの了簡、これも又讀ぬれいの一脉アシをふいふ心でござ
るぞいのと問バ惣五郎打點頭アシタツヒ、成程く、皆の衆の不審尤アシタツヒわしも昨日
れどふ有ても宿へ引まいと腰すへてつゝぱつて見たが、所詮是ハ塔明
ぬと見すへたによつて、皆の衆に目くばせして、無理に引ばつて戻つた
も、ちつと分別の有事じやないの、其又分別といふハ、ザレメイ將門山を出
る抑ハシマ、此七人の命ハシマ的ハシマそれじやによつて斯日數を重ねても、願ひよ
出るのじやあいかいの、そこじやての、的ハシマかけた命でも、捨場によ
つてハ犬死ハシマ同前ハシマ犬死してハつまらんじやあいかいの、成程ソリヤそふ
じや、そこでわしが思ふにハ、逆も是ハ涉地頭ハシマ塔明ぬ、涉家老用人殿

様も乘^のこして恐れをがら管領家へ、直訴する積^づじやわいのと、いふよ皆
皆悔くりの口を押^おへて^は、是^ハ志たり何の悔りする事^ハあいわいの、國
の殿様へ直訴して、願ひが叶ふてからが直訴のむ咎め命^があぶあい^サ叶
はずば猶の事、どちらでも首がけの仕事じや、同じ命がけの仕事あら人
ハ一代名ハ末代思ひ切て管領家へ直訴する私^ガ心^マ分別ハ此通外に
思案^シあいわいのと、投出す大膽^{だいん}大丈夫思ひ込でぞいひ放す、皆^ハ一
度に感心^{かんしん}の、中^よ年かさ千葉村の忠藏^{ちゆうざう}、適^よ惣五殿^{そうご}そふあふて^ハ叶
いぬ所、からハさつぱりと夜が明た^{サア}、これから相談^{さうだん}亥^いめ直し、七人の
者共がつれ立て、管領家様^{くわんれいしゃじやう}へ直訴が肝心^{かんじん}、思ひ立日が吉辰^{じん}吉日、片^{かた}時も早
ふとせり立れば、惣五郎押^おと^ハめ^ハ皆の衆せく所で^ハあい、管領家へ直
訴といへば、御地頭^{ごじとう}と^ハ違ふて、中^よ容易に^ハ行れぬ事、尤斯^そ躊躇^{しゆ}がかたま
つたら、誰彼の差別^{しやべつ}ハあい、来る廿日^ハ管領足利元氏公^{さん}建長寺へ御佛參^ヒ、

れ究竟の時節到来行烈の途中に待受、國の政道ことぐく、訴訟又志たため差上ふとの恩へ共^サニ爰をよふ合点さつ志やれ、管領家のお成といへば、人又人が付添て影もかたちを拜まるゝ物でひあり、其中へ七人の者が顔を崩^{そろ}へて、出それそふあ物かいの、ほんにそふじやの、それじやによつて、工夫をこらし仕^くかふせねばあらぬ、いか様のふ、そこでわしが思ふにい、此内六人ハ、隨^ナ分人目にからぬやうに國へ歸り、殘る一人が請込で、建長寺の參^{さん}内橋^{なべ}といふ様あ所に隠れ忍んで、折を見合し乘^の物際^{ものざり}すといふ時願書をば、竹又狹^{はざ}んでさし上あ、ばよもやお取上のあい事^ハ有まい、これが工夫の奥の手ヒヤハいの、そふ成たら味い事じやのふ、其役目ハ七人の内誰がよからふ、爰が性根のすへ所^サニ皆の衆本心を定め、銘^{めい}明して見や玄やれど、いふハ互ひの往生際^{まぎ}暫^{いと}し息づむ風情^{ふうけい}、千葉村の忠藏横手を打^た、納得仕ました惣五殿^ち、智惠といひ義心

といひ、ケ程の人をむざくと、命がけの事さゝんぢて、こあたへ跡みあがらへて二百廿九ヶ村の後見と成万事の差圖、此忠藏こそ年寄役めいど
の旅の魁せんと、思ひ切たる老人の、詞も待ず半十郎ヲバヤく思藏殿の申分
其意を得ませぬ、年寄ての一一番鑓近比もつて心元あし、此役目へ此半十
郎に打任して下され、首尾よふやつてか目にかけふゝ必案じて下さる
あと、老を助る禮義心、健氣にも又殊勝へ、惣五郎二人をあだめかゝる場
に成、老若の差別へあい、去あがら誰彼の争ひせんと、今度の役へ我等よ
まかせ、跡へ残らず國へ歸り、管領家の渉沙汰を待給へ、思ふ子細もある
事あれば、曲て我等よまかされよと、押ての詞聞あへず、我等が、われ
がとたがひの義心張つよく、争ひ果す見へにける、迎然制して、ハレ皆の衆
の義心感じ入、不肖にへござらふが、此度の此役目へ、惣五郎よさしてや
つて下され、平に此迎然が皆の衆へ頼みます、お前方も知ての通り、此認

五郎の筑紫生れ、肥後の國、音川家の御領分、高津何某、近親代々の大庄屋。所の事で家の欠所、懸僧が爲に母方の甥、其縁で此伯父を尋ね、下總へたゞり來たを、寺に置て世話をする内、村の衆にもあじみがふへ、發明あが耳に入、養子にくれよと達ての所望、養父惣左衛門殿へ過行れ、今でハ細き煙を立、身貧にハくらせ共、大庄屋の給米で、女房子を今日迄安樂み養ふて來たり、是皆養父惣左衛門殿の影、百姓衆の助力、多くの人の身がへりと成て死れバ、先祖への孝も立、又義も立道理、命ハ風の前の燈火同前、此道理を聞分て、義民の爲に死てくれ、養父の名迄かゝやかす、人の鏡とあれかしと、義氣をふくみし老僧の涙交りの、物語り元々義膽の惣五郎伯父の慈悲心、添涙、強訴ハ罪の妻子にまでかるる因果を、前生の報ひと思ひあきらめて涙呑込忍び泣、迎然始め人とも、身につまさるゝもらひ泣たもとを、玄ぼる斗へ、氣を取直し惣五郎、（ア）お前方へ出立の盃、此惣五郎

郎も何角の用意追付奥へ参りませふ、やそんあら惣五郎殿、こあたの詞
み隨ふて、一先國へ引取ませふ、何角へ奥でいづれもと、迎然諸共入にけ
り、空さへいどゞ、薄雲る月の光りも、臘ある胸晴やらぬ惣五郎、あたり見
廻し取出すおのが心みかけ硯深き、思ひを書殘す妻子の事も身みあま
る落る涙の玉章よ、余所の哀を、白壁の憐に諷ふ三味の手へ、ほんに昔の
むかしの事よ、我まつ人のわれを待けん、嘸や國にへ子供等が、どゝが
歸りを待ふらふ、土産にへ何を買て、何をくといふた子を、嘸やあさん
がこまりおろ、どゝが行衛を尋られ、何と透して居をるやら、聞も淋しき
一人寝の枕にひゃくあられの音、人の心も玄らずして、今隣又彈諷ふ
、雪とやらいふ唱歌、消るを目出度雪成、文字に直してよむ時へ、すゞぐ
共又讀と聞、多くの人に成かり恥辱をすゝぐ惣五郎、アとへいへ不便
ハ稚子と落る涙のつらより、つらき命へおしからねど、戀しき人へ罪

ふかき我へ思ひぬ悲しさに捨た浮世に捨る命神も佛も納受有どと思ひ
ず涙にくれ六ツの、かねての様子後より始終見濟し迎然和尙、コレ惣五郎、今
書きやつたのハソリヤ何で、そんあ物を國へやり、又女房子を泣すのか、其
様あ性根でハ大望、成就覺束あい、モ未練あ心と引たくりはつたとにら
みし老の逸徹、胸にひつしと惣五郎、思ひ切ても凡夫心死後のかたみと
書置の、今更何と言譯も先非を悔む後悔涙、迎然も惣五郎が心をさつし
面を和らげコレ惣五郎、此狀ハ伯父が預り、もし物事が有た時、これをそあ
たのかたみにせふ氣づよふ云ハ此伯父が氣をたるません爲斗、コレ必惡
ふ思ふなど、ぞふぞふして泣居たり、奥ハ出立の旅用意皆打つれて立出
る、こあたれはつと泣顔隠し隨分共に惣五郎首尾よふ仕おふせよい便
を、お氣づかひ浮無用、アとへいへこれが一生のハチやくたいもあい、身を
捨てこそ浮無瀬もマ祝ふてめでたふ名残の盃、チット心得めいくよ、取揃

へ出す盃も、氣をはつたりとかん鍋や、聲さび調子張上て、とりくあれ
やあづさ弓、矢だけ心の一つある、強者のまじわり、頼み有中の酒宴かあ
げえ頼み有強者の中に残りし一羽鳥、夕告鳥の音もちかき、國を隔し妻
鳥の子を思ふ羽がさぬもあいすたがひの顔と顔、さらばと斗一聲がち
かき別れと「成にけり

淺草のだん

人中の龍、物かゝ類ひあき、義民の中を拔出る岩橋村の惣五郎、誰憚ら
ぬ心にも望有身のづから、小影へ寄の思ひして只一筋の廣小路、淺
草寺に勧行の聲も遙に申の刻面訴の場所へかねて、爰ぞと思ひ定置
一心不乱禮拜のかへりもふしも限り有日も北風の肌寒き、寶垣の床も
足休め、爰幸と腰打かけ、腰打茶を一ツ頼みほす、養花所望と云ければ、
こたへて汲で出る姿、十に七ツ八ツ過た器量の丸鬚の前垂櫻愛らし

し、惣五郎笑、繕ひ^{アラシ}美しい女中様、お前の爰の娘涉か、年へいくつと尋ね
ペ、年へ漸十八あれど、私へ爰の本の娘で、ござりませぬ、そんあら
養子娘じやの、ジテ母親斗か夫も有かと、根間に赤らむ顔隠し^{アラシ}、おやさし
いお尋ねふ恥しい事あがら、稚い時も二親が音信不通の約束で貰ひれ
て來ましたれ、ペ、歸る内は、ヘ中へに分て、厳しいかゝ様の、氣の取くる
しいが、苦に成て、晝^{ヒル}へ茶店の水仕業、夜^レ機織賃つむぎ、紅おしきいも何
の其、着かざる衣裝も其儘に、勤せよとの難題も心に染ぬ、夫結び、紐とさ
やらぬがくせ事とつめつたり、叩いたり、ういめつらいめ辛抱するも、本
のと、様かゝ様に、一目逢たら百年も、あふた心もせふ物と、日毎の參り
に氣を付て、祈る神様佛様、觀音様の、利生にも届ぬ便も証明す、心を推
量してたべと、間^{アラシ}ず語りも身につれて、もらひ涙ぞ、いぢらし、惣五郎目
をすり赤め^{アカ}、哀あ咄^{アハタ}しを聞まして、思ひず涙をこぼしました、去あがら

何事も皆約束事、年端行ねば案じるべ無理で、あいが長い浮世に短い命、兎角時節を待が玄んぼう、有がたふござります、ほんに私とした事が身につまされてののかこち言お客様へ大きにぶ羨む笑ひあされて下さりますあへ、お恥かしやと袖覆ふ、ふじや最前から茶の水が切たをどんと忘れて居ましたイヤお客様、一提さげてきやんす間暫しの内店番を、安い事じや格別遠いといふでも有まい、早ふくんで戻らしゃれ、あいの渡襖引立てこそ出て行、惣五の跡に只一人、つぎは投出す身支度も、早けふあすにせまりくる、必定て獨言、誠や人間一生り重荷を負て行が如し、急ぐべからずと示されし、氣を安らかにくらせよとのおしへ、うれみ引かへ此惣五、人の爲に重荷をおい、あすをも知ぬうき命捨に行も親への義理、管領家へ直訴して、譬一命終る共何とぞ實父養父の名をもかゝやかし、末代迄人の鑑共言れて死れば此身の本

望、又ニツムハ女房ふさん、あく迄我への貞節との知れど、妻子に心引か
されて、未練あ氣も出よふかと悔やむにいどゝ、氣も細る、胸のやみ路の
晴間あき、雪の頭の枯むぐら、亂れて、いつも物思ふ、古へ人の言の葉を、た
どる、足元とばくと歩かゝりし箇箆かげよし有げ成惣五が人柄、それ
と見るる立寄て、申す稚い者をつれまして、袖乞み出ますべく、一錢の治
合力、かあさけお慈悲と手をすれば、身につまされて惣五郎五郎、いとしや
年寄ての袖乞、殊に稚い子をつれて、定てこあたの孫そふあ、嘸難義でで
ざらふのふわづかあれぞ志と、つかひ余りのはした錢、つまみ錢ぞと差
出せば聞、有がたい、お情深い旦那様此おあしひ私らが、家内六人のか
てと成爰にもいさゝかもらひ溜是をたしに今日の露命露めいへ漸取留まし
たがあすの命の燈火の風も無常のお迎ひが、早ふこよかしあぢきあや、
つれあの老の命やとつまぐる珠數の、王の緒も切る斗の息づかひ、浮む

涙の惣五郎、氣をとり直し、^{ヨレ}く婆様、けふいおれもちと氣詰りある事か有
て、うさを晴しに出た所、爰の茶店で休む間に、内の娘の述懐、咄し、今又こ
あたのしうたん咄し、聞に付、涙の問屋が出来そふあ、シカふ見た所が、賤
じうもあい身の取廻し、ぞふした事でかふいふ身にあら志やつたぞ、定
て是より譯が有と、人の落目も捨置ぬ情の詞に玄られたり、老母ハ目に
持憂涙、漸に押ぬぐひ、私ハ元下總生れ、世又有時ハ人にも少しひ知れし
夫、思へぬ難みて不慮の横死、それから家内もちりぐよ斯成果し身の
上を、哀と思ふて給ひれと、さめぐと、こそ泣居たる、^同スニ、こあ様ハ下總
生れとや、ハテ夫ハあつかしや、わしも下總にハ知べも有、シテコあたの夫ハ
何と云ます、サアお聞あされて下さりませ、夫ハ下總佐倉にて、松屋五兵衛
と申ましたと、聞て恂り惣五ハすり寄、^同、そんあらこあたハ松や五兵衛
のお袋かと、驚く顔をつくぐ詠め、夫の名をばお聞あされげしからぬ

驚きへもしや身寄のふかたかと、ふしき立れへ惣五郎、合点の行ぬへ
斷何を隠さん我こそい岩橋村の惣五郎と聞て老母へ打驚き、扱はああ
たが噂々聞、惣左衛門様の養子に惣五郎様と云を押へて、声が高アツコトいわ
しもちと子細有て此鎌倉よ大分逗留、同じ所と云あがらて、あたの夫が
死れたれ、わしがまだ岩橋村へ養子にあらぬ前の事、死れた先の舅殿が
兼々嘔カクしも有たれど、あふたへ今が始てじやが余りきつい落果様、そふ
して、息子殿も有たと聞たが、一脉マツをふ志られたと、問れて老母へ今
更々何とこたへも詞さへ涙にむせび居たりしが、世々便あき我アキが身
の成行を聞てたべ、夫五兵衛ウジエイの無實ウゼツの罪で邊國ツバシキを追放、家財かざいとい
ふに及ばず、田畠迄も沒収モツシウと成、何國へたよらん方さへも泣くさまよ
ひ鎌倉に、少しのゆかりを力草、薄きけふりも立かねる貧苦ヒンクの中よ悴夫
婦孫三人、此ばゝ共に六人が、何をたつきの當もあし、くらしかねたる憂

世帶親の非業を苦々やんで、悴へ此比ぶらく病夫の介抱其中で、乳のみ子かゝへて水仕事、母にうきめを見せまいと、嫁御一人がうろくと、苦勞仕やるがいとしさに、せめて子供を手助と悴が病氣本腹を觀音様へ日参と、内へ偽り、つれ出て往來の人の袂にすがり、一錢二錢の合力も少しひせたいの便りにと思ふてすれど淺ましや、樹や五兵衛が女房や孫が亥よさか情あや、今始めてと云あがら、同じ所のああた様にかゝる姿をお目にかけ、おはづかしやと斗よて顔をも得上ず、さめくと泣くとくこそ道理あり、始終聞居る惣五郎、目に持涙とめかね、たゞみかけたる手ぬぐひの絞じくもにじむ斗アツ、こあた衆の物語り、我身の様に思ひれて、ちらひ泣をいたしました、併肝心の息子殿が、病氣にて何角に不都合、幸い爰カナヘ買合した鰻カサギのかばやき、是を病人にしんせてくだされ又ちつさへの土産に、譏カツカあれど財布の残りと、差出す錢と皮包カウチ其梅か

香にあらね共、香やの隠れぬ善根の人の匂ひぞ尊びれ、有がたい忝ふ
ござりまする。孫よどゝ様の病の治る薬、又お錢もたんと下さつた。手
をついてお禮を申せア、わたまが高いと、手でしかた、申旦那様、ども
さんへお藥を下され、忝ふござります、サばく様お禮申た賃下されど、廻
らぬ舌も子心に、眞實見へて、哀れく、惣五郎も感じ入、利口あ者じやあ
内にも嘸や案じてござらふ、まだ嘔したい事もあれど、明日をも知ぬ
あしが命、わしが用事、又重ねてあひませふ。年寄の子供をつれ、けがせ
ぬやうにと深切を、聞いて老母の嬉しげに、左様あらべ、且那様隨分傍ぶじ
で、あさらばと孫を杖共柱共とぼく歸るうしろ影、見送り見かへる夕
まぐれ、かすかに、鳴や入相の、かねて覺悟の惣五郎、只忙然と立けるが、氣
を取直し傍を見廻し、水の流れと人の行末下總佐倉の下にて、舛屋五
兵衛と云れて、一二を争ふ分限者で有たそふるが、謗む科を云立に家

取趣の其上に、家内残らを追放とす。余りむごい取さべき。これといふも
か家を望む大惡人杉山彈正が皆玄へざけふ人の身あすの日へ、我も
消行其跡で、妻や子供がうろくするを見る様あり。さゑも丈夫
の男氣も、そゝろ涙に、くれけるが惣五郎涙押といめ、せめて今一度妻や
子え暇乞をと指折かぞへげふ。師走十七日兼て覺悟を極たる、直訴の
日限の廿日、さすれバケふ。四日の日取、これより本國迄ハ几十口五里、行
戻り合して三十里又ハたらぬ道、いつそ一へん遁でのけふか。もし
隙取バ伯父迎然、残りし六人に夕部迄立派にいひし約束の、義を立合た
盃のかへく間もなき袖の露もしや人目に見付られ、不覺を取バ我斗か。
末代迄の家の耻、とやせん方も踏み迷ふ、道ハ二筋心ハ千々、惣五が思ひ
千万無量行つ戻りつとつ置つ、心を定め手を合し、南無大慈大悲の觀世
音菩薩國へ歸りて戻る迄、道中無難に守らせ給へ、南無淺草觀世音と。

心込ていつさんば、本庄通り眞直江印幡の里へと急ぎ行

渡し場の段

次第くよ、老の坂いつしか見たる若人も、早額みへ年の數、つもる白髮
や白雪も、解れば同じ谷川の流れもたへず下總の、印場の、沼や行先を、知
ぬゆへかや此流れ間うの川とぞ人ぞ、よぶ。其名も四方に立登る、細き煙
ハ此里に、渡し守する甚兵衛迎、どしきふり積雪道に吹寄、窓の垣生住、衣
かたしき、獨寝、いとい寒氣ぞ勝りけり、甚兵衛の起出て、庭戸上て伸あ
くび、テア雪が降、往來も淋しい、又往來が淋しければ、此甚兵衛の懷も淋
しいといふ物じや、其淋しいついでに、村中の上を下、ソリヤ寄合じやの、
判じやのと、聞度毎に思ひ出す、貧乏しても年が薬モレ一あたり温まつて
來ふかと、地爐の傍で柴ぼさく、折節來かくる旅の僧、墨の衣にやぶれ
笠、渡し場近く差かゝり、そこよ居らるゝの渡し守そふあが、我の下總

の成田へ参詣の旅の僧、ふぞ無錢で此渡し越してくれる氣へあいか
といへば甚兵衛困り顔相それへ渉笑止せしあ、玄アメニたが渉出家、爰アメニへ間アマニの渡
しといふて、人一人に付て役人アメニへ、それ丈宛アシタハの運上アシタハを出さねばあらぬ
じやて、それへ又困つた所アシタハじやなアシタハこれから十八丁先にと云アシタハを打消アシタハ
アレアシタハ山本の里あれバアシタハ佐野の渡り、それも雪道爰アシタハも雪、ふりあふ袖アシタハも他
生の縁源左衛門よりいつその事、錢無右衛門で渡してほし、三本の鉢
の木より。三文もあい拙僧に垣根をくべて焚火の馳走アシタハ爰アシタハへ所アシタハも渡し場
あれバ、一番せんと當りますと、手を差出して寄添アシタハバアシタハ氣の軽い渉坊様
イモアシタハ氣のかるいより尻アシタハのかるい爰アシタハの寺に三日、かしこの寺より五日、氣
客アシタハのみの氣さんじアシタハ、家賃拂アシタハ旅籠アシタハ錢、入ぬ氣がぬに餘所の子を抱た
り負たりあげくに、飯アシタハも焚アシタハたり水仕業アシタハ、どんあ世帶も苦にあらぬ隨分
お前に成かり、此川舟も押ませふぞ不便と思し召、四五日内に置

氣へあいかどいふよ甚兵衛興覺顔ほんによふ志やべる浮出家で有ぞ
いのと、互ひに笑ふ。其所へでつくりこへた商人へいへぬ先から太物屋
木綿布子の綿厚ふ雪氣凌いて只一人、待ねばよいがと思ふたが丁度よ
い首尾、したが二人で越へ氣の毒あ、其内容も見へやん志よどいひつゝ
上の土手のうへ、地爐の傍に手を差出し、親父殿こあんいつ迄もかれ
らぬのと、いへば基兵衛、旦那何をおつしやるやら、餘程加減がちが
ひました、年よりよつばぞ若ふ見へるて、又降そふある空に成てき
た心がせきます、早ふ渡して下されと、頼めば合點と尻がるにもや
いはせけば、船さし寄、乗しやれ、乘志やつたか、よいか出すぞや、あぶ
あいぞや、よいかのと、差出す聲と諸共に又もかけ来る、足音の急ぎの人
か白浪の、船へ次第に霧隠れ姿へ見へず成にけり、かゝる所へ杉山が組
下黒崎平馬、何か一物、懷より用意の笛を取出し、誰か呼子の音につれて、

すつと出たる印場の喜右衛門、あたりうそく見廻し、平馬様、喜右衛門かね
聲が高いと目で仕かた、あたりに氣を付ひそく聲、喜右衛門かね
て汝なんじがしる通り杉山様より密事のほ狀と渡せば受取封押切さらく
と讀下し、惣五郎が詮義の爲、此渡し場へ忍びしも、岩橋村へ元より、二百
廿九ヶ村が出入り越ねばあらぬ渡し場、關所がいりに氣付る此喜右衛
門、今又仰の此渉狀臥龍と名づけし名笛めいごを我に預る此文牘、其代呂
物もの、爰あにと取出す何角白地の小金襴、渡せば取て懷中し、委細の事へ
呑込のした、又此一品ハ慥に預りますから、ちつ共お氣つかひ下され
ます、其詞を聞からハ彈正様にも喚めは安堵喜右衛門ぬかるるめ
かうと、跡あと互ひに耳と口、ナ合點かくと兩人の跡、白雪と別れ行泡あわ
消行白雪のおからを背に豆八があふてとばく若夫、背中をかるし
て結びゆまきの紐ひもや、揮ふんせきの身につく物ものの子の、親より外につくば

かり三レかゝや爰アヘの難澁ハダシはだし道、露アマニて湯ヨウもしもぬれ所、今道ミモいふ通り、此豆八ハチの太切ハサクあい、御年貢ハシムタも不納ハナシ、また其上に大恩請ハシムタし、浮庄屋様ハヤシヤへ義理ハシムタわるけれど、豆八ハチこそハ逃ハシムタぬ、あらぬ、そあたハ跡ハシムタにあからへて、我ハシムタ借ハシムタ錢ハシムタを排ハシムタふてたもどハシムタいふ顔ハシムタ亥ハシムタつと打詠ハシムタめジリヤ聞ハシムタへませぬ豆八様ハチ、そもあひかかる多見藏ハシムタより、末の助壽郎迄ハシムタひかへし、玉七姫ハシムタを惚ハシムタさして、丸幸延三ハシムタも梅幸ハシムタの豊島屋ハシムタおられても、恩に其答ハシムタ、ほんの翫雀ハシムタと思ハシムタふ物、大五郎ハシムタの梅舎ハシムタのみあとの南枝勇枝ハシムタの璃蝶ハシムタに、新四郎ハシムタてハシムタ男女藏ハシムタの路之助ハシムタが松島屋物ハシムタか、このふくハシムタと取付ハシムタて恨歎ハシムタくぞ道理ハシムタ、あきやるあくハシムタ去ハシムタがら、在所ハシムタへ残ハシムタらず取立ハシムタがきひしハシムタ成ハシムタて、現十郎ハシムタ、そあたハ世間廣かる片市云ハシムタすに葉村屋ハシムタへ、早ふ歸ハシムタつておから殿ハシムタ、それへ璃寛ハシムタくヨリヤ、わしを駒三郎ハシムタらすつもりじやあ、團藏ハシムタといふと九藏ハシムタくらへといふてかしらぬが、ヨレ豆八様ハチをふさんす、私がお胎ハシムタの小團治ハシムタを子ハシムタ訥升ハシムタと思ハシムタひんす、わたし斗ハシムタに氣ハシムタをも

ましかまへへきよろり冠十郎、是程思ふて三升物、稻丸あざゝへ胴欲じ
やわいあゝ^{シテ}暫し松十郎行へ友藏と云かへし、市藏につれて行乞やんせ
とすがれば楯藏で取てつき退^{ハシメテ}ほんに桂車をいふ通り、慶子かゝざるそ
あたの思ひ是から先へ行流れ、金作とても一文あしそこの奥山澤村に
奉公するやら、又生島に渡るやら、よい友吉が出来次第、續十郎時分に必
しらず、先それ迄はそあたの内に松五郎、雀右衛門からあじみ志や物、わ
しが心の文七じやめつたにわるふゝ千之介、他人の様に思へぬとい
へばおからりすゝり上、涙と鼻^{アヂ}を呑込んで、おまへに別れわたしや又外へ
圓藏結ふ氣^{アリ}、ちよつとも嵐三津五郎、そりやおゆるじ共や、おたのやす
す、ほん々昨日の朝太郎にふしきの夢^{ウカ}を已之介や、あかん兵衛との辻占^{ツカヒ}
を、菊次郎かと胸せまり、私の様あぶたふくでも、皆人様にあびいたら米
藏のかへく際^{ヒタチ}へあいわいあゝそれに團十郎や憎らしい、お前の心が嵐

吉で、私をむごふ勇次郎、憂目三よしやかんあんもさすへお前が森之介
主か家來かほうぱいかわたしや女夫に成田屋で、其惡縁が白猿かとす
がり付たり抱付たり放れ方あき其所へ折から來かゝる渡し舟見付ら
れじと豆八へおから引連走り行甚兵衛舟をつあき捨又ふり出したに
此娘へ何しておるやら早ふ辨當もつてうせればよいがとつぶやき
く小家の内へと入所へ心ひさらに後れねぞおくればせ成惣五郎苦
勞くらへ有あき白妙しらたの道踏分て立歸る妻や我子に逢坂の關にせいたる雪の
道忍びて漸やがく小家の傍そば甚兵衛殿くといふに甚兵衛立出て顔見合せて
ああたへ岩橋の旦那様といふ聲押おさへてて甚兵衛殿今おしが身みお
尋ね最中此惣五郎を見出さん迫それへく恐ろしい手くぱり其中
を漸と戻つて來たひ先祖や妻子を始め我家への暇乞ひまごふぞそあた
の了管れいかんで此渡し場をさたあしに渡して下され甚兵衛殿と頼めば甚

兵衛差寄て、^間ア且那様勿^も身^だあい事おつしやりませ、ああたの舅^{おじ}惣右衛門様にハ大恩の受ました此甚兵衛^ヲ、アもお恥かしい事あがら私を腹からの渡し守りでハござりません^{相應}田地もござりましたあれ共年々續く不仕合せ終^ニ重る大借錢取分重いみしんの溜り、地頭様へヤ譯立がたく、長^きの水牢^牢もお赦しあけれどは是非もあく、元より一家親類もあけれどはづくあふあだてハあく、今をも知ぬ露の命、取留て下さりました惣左衛門様、不便の者と思し召、大まい金子卅兩お取かへ下さつた斗に、水牢も免其上に、所拂ひも其まゝと、有た時の私が嬉しさ神様共佛様共譬^{たと}かたあるをああたのハ恩其御子息のああた様ありや、私が爲にハお主様あり、命の親、その様ある事がござりましたもめつたに他言ハ致しませぬ^え、夫を聞いて落付ました、こあたの心底見抜てハ居れど、薄^{うす}の穂^ほも恐れる時節、必氣にかけて下さる、あやといへば甚兵衛何が

扱、私に如才があつてよい物でござりますか。斯いふ内にもお心せき、まだお咄しもござりますれど、此所へ往來との様あむつかしい咄しども、云流し聞流し、舟に召て、川中、深い心の甚兵衛が情心ゆるさぬもやい繩とけて嬉しき惣五郎、ひらりと船に飛乗折から互に物へ岩橋の村の我家にいそぎける

岩橋村の段

冬の殊更物淋し道も烟も白妙の雪に埋てとけやらぬ恩ひもいと印
幡鄉心も堅き岩橋の村の撓を藁ぶきよ白壁添し家造へ云ねと知し名
主のかまへ妻おさんへ此程夫の留主を明くれに案じ煩ふ立病兄惣
平の年さへもまだ十の上二ツ三ツ、越てもいとい親忘了ふ父の便を松
の柴折て地爐にさしくべる傍に、ころりと丸寝の兄弟、喜八郎、源助、惡
あがきが過るやら、此ア寝やうとした事が、風ひやんを喜八郎と抱

てこあなたの稚子の傍へ寝さすも志ら川夜船源助と寄添ば、いやじや
くと寝はれ盛おほ、何と仕やつた、何を夢ゆめでも見やつたかといふにしく
玄く泣子供なきこ、わしやど、様が遠とおい所から戻つて来てお土産みやげによい
物もらふたら、喜八郎や三之助が取故に、いやじやくといふて居たが
そんあらわしひ夢を見て、無理をいふて居ましたか、此ど、様へなせ
遅おそい早ふ戻つて下されぬげふも子供が遊あそんで居る故軍事ぐんじせふといふ
たれば、大將だいしよませぬといふ故おれわれいつでも大將だいしよじやといふたれば
くお前まへの親おやぢがあい故、親おやぢのあい大將だいしよいかぬ、家來けらゐにあれと云おつた、わ
しやそれが口惜くちごい、よしか、様、ど、様が戻つて、有あいたら、みあひつらを
家來けらゐにして、わしを大將にして下されど、わつと泣出なきだす子供より、聞母親
の胸むね一ぱい引よせく抱いだべて、尤ますじやく、いのふ、追付おづけと、様がお
歸かへりあされたら、わがみを大將だいしよとしてやる程たまに、夫樂つうらくしみに待まつて居ゐや。

いふものゝいぢらしや、是み付ても惣五郎殿、多くの人に成かへり、鎌倉
迄もかけあるき御苦勞あさるゝ甲斐もある、其子供等が此様に、かた身
もすばりさげしまれ、何の因果の報ひみて氏神様にも見放され、拙き運
やと嘆き、ぱり余所を憚る忍び泣理り、せめて不便へかゝる折から表口
親子のあげき白雪を笠に凌いで來かゝる歩行、門口から差覗き、申ふ
家様、まだ旦那のお便り、ござりませぬかといふ聲よ、涙隠して、云々誰か
と思へば太郎作殿、雪のふるのにそこへ、幸いいろり又焚火も有マアあた
つてから行しやんせといふを詞の鹽にして、すつと這入て、傍を見廻し、
トお家、いかふは勝手がかゝりましたあ。そふして子達たち皆お休やすみかと、云
つゝたばこすつばく、おさんへ猶も愛らしく、よふア深切に尋ねて下
さんす、せめて寒いにお茶一つと云つゝ立て、汲茶くわ心の端香はなかさし出す
手先をじつと、おさん様様、こゝあ湯内ゆうち湯先祖から、代々續く名主の家

柄、今 の 旦 那 の 心 得 違 ひ か ら 男 女 の 皆 お 暖 そ れ 故 に お 前 様 が 仕 付 を せ
ぬ 水 仕 の 業 事 見 る 度 每 に 此 太 郎 作 お 気 の 毒 共 笑 止 あ 共 い と し う て く
涙 を 内 へ こ ぼ し ま す 此 細 い 手 で あ ら れ も あ い 飯 も 焚 た り 洗 灌 物 定 て
て い が つ め た か ろ と ふ ぞ 私 に 少 し で も あ た い め さ し て 下 さ ん せ ざ ふ
も た ま ら ぬ 一 と 突 収 手 先 ふ り 放 し 調 太 郎 作 殿 お 前 ハ マ 何 と 思 ふ て
ぞ 此 さ ん に い あ ざ 捨 五 郎 殿 と い ふ て れ つ き と し た 男 が 有 ぞ へ 踏 付 た 事
さ し ゃ ん す と 私 の 主 に 告 ぐ ば と く お さ ん 様 お つ し ゃ ん あ く ハ テ ハ 云
あ さ る あ い あ い 其 捨 五 郎 殿 の 鎌 倉 の ほ や し き で 、 涉 門 訴 の 頭 取 し て 一
揆 の 中 の 発 徒 人 今 で も 戻 つ て く る が さ い で 、 步 行 の 役 じ や 此 太 郎 作 恐
れ あ が ら と く な せ ば あ ら ぬ そ ふ あ つ た れ バ 捨 五 郎 へ 直 に 繩 は ら れ 獄 く
門 か 但 は づ つ け か て こ か く 併 お 前 の 心 次 第 で 又 助 る 事 も 有 じ や て の ま
そ こ へ 一 番 此 鼻 は な が 又 分 別 も 工 夫 も 有 て や ヨ お さ ん 様 う じ ょ 心 有 バ 水 心 と

やら、さゝゝとふじやくと太郎作が抱付吸付姫松にからみ付たる鬼薦の、放れかたあき其風情、持餘したる其所へ暖簾引上かけ出る惣平ヨシハ申かゝ様、今佛頂寺の和尚様が、爰へお出でござんすと聞てびつくり太郎作が思ひがけあきとふふくらへ數から坊主のお出といえらい杓子じや、ガコニヤ、今の咄しへ又後アフタと、己一人が呑込んで、跡をも見ずにぬれ氣取笠引かたげ逃て行跡打見やり門口をさす間遲ゼラと伏轉マサルひ、女心の一筋に口惜モレ涙にくれ居たる、惣平悲しく縋り付脊撫セナモモさすりやかゝ様、嘸口惜ふござりませふ、其様又むづかつて、又御持病チヒラが起つたら私等ヲ何とせふモサかんにんして下さりませと、おろく涙モモロシ母モトいたへかねヲ、よふいふてたもつたくのふ、子心にさへ其様に思やる物、わしが心を推量スリヤウしてたものふ、シテ伯父様ハされどござる早ふ是へお供仕ヨシハシや、イとあたもござらぬぞ、お前が難義ミツイさしやんす故、わしが欺ハダシしてやりましらタ、そんあ

らわがみが斗ひで、伯父様がござると、僞り母が難義を救ふてたもつた
か。夫は、よくよふ氣が付た出かしやつたくくのふ道の父の子程
有、と、様がお歸り有バよい賃もらふてやりませふ、母が事のかまは
ずと、奥の火燶で、早ふ寝や、左やうあらばおか、様おまへも早ふお
休みと、堅い禮義も名主だけ別れて奥へ行跡え、おさんハ一人物思ひ、傍
見廻しきてほんに浮世と云あがら、あぢきあき世のあらひ、今此落目
えあれば、迎現在主有此わしに無躰の戀路、何事ぞ、これに付ても惣五
郎殿、そこえをふしてござるやらもしや勞れも出よふかと、案じ過して
一夜さも寝たる夜もあき妻や子を不便と思ふ氣へあいか、聞へぬ夫我
夫と返らぬ事をくどき立わつと斗に歎きし哀、いや増斗へ漸に涙を
とじめ、あげくまいく、いつ迄いふても返らぬ事、何ば泣てそこがれ
ても、お聞濟有迄、戻りせぬとかたい誓言、此上、諦てせめて夫の

開運を頼ん物といふ禪祈誓かけまく神棚へ備ゆる神酒や燈明の火か
げを照し泣くも一間へこそ入みける荆棘の中に紫蘭を生じ砂の中の金とかや人の心の剛臆さうぎくの武士町人に限るべからずされば佐倉惣五郎國民の爲身をかしまず強訴の大望有によつて妻や子供に餘所あがら暇乞をと思へ共晝は人目を憚りて夜道を急ぐ一人旅真間の渡りも打過て古里近く成ければ幽に見ゆる我住家たる木まばらに傾きし窓にうつらふ燈火のかなり果たる有さまを見るゝ惣五郎胸せまり、誠や人間一生ハ此案山子の如くみて稻熟すれば晝夜よ百人の代をあすとといへ共竒入濟ペ火に焼れ夫故故歌に詠せしとく山田守僧都の身こそ悲しけれ秋果ぬれば問人もあるし我身の上もまつ其如くはからずも此度の大難我身一人に引受る覺悟ハ元も極たれ共跡に残りし妻子に迄いか成うきめのかゝるらん我亡跡の吊ひもいづくの誰があも

それん思へばはかあき身の上やと、さしも丈夫の男氣もそぞろ涙にく
れけるが、ハツ心を取直し、我あがら未練あり、時ふくれてへあしかりあ
る、と云もの、長の留主内の様子といかゞど、さし足あがら瀬戸口
を、覗け、妻の寝もやらず、人待顔の其風情を女房かあつかしと飛立心
押沈め、おさんくと音あふ聲、思ひがけあき女房へ又畫のわる者め、よ
れみを見せて、叶のじと態と聲を勵して、せあたでござんす、夫の留主
の女房に、夜更て瀬戸からぶ駆、用事が有バ明朝でんせ、と強ふ云ても
心でハ拜ぬ神もあかりける、長々の留主の中、子供の介抱、心勞に有
つらんど云つゝ、這入顔見て惄り、且那殿かと走寄、物をも云ず絶付、嬉
し涙にくれけるが、漸涙押さづめ、聞へぬぞや我夫國を出て、四月越、梨
子も疎も、音信も泣こがれたる女房子を思ひぬ仕方の胴欲あ、何ば男を
立る辯、義理立もよいかげんむごいつれもいお心と恨み歎くぞ道理成

其恨ハ理リあるがら、うちも兼て知通、元某ハ肥ハシ後の國熊本領ハシにて五ヶ莊ハシの產ありしが、先祖ハ平家の落人ムテて、一村殘らず無年貢ハシの土地ハシありしに、時の役人の斗ハカラひにて、年貢ハシの取立ト一揆ハコ起り、多勢の難ハシを引うけて、某一人ハツハチ追放ハサウと成、則當村佛頂寺ハヂドウジの迎然和尙ハヤシ、俗縁の伯父ハセヲ成ゆへ、此下總にさよよひ來て、不思議ハシの縁で此家へ入聟舅殿ハシ又も世ハシを去て、名主の役義ハシも相續ハシすれべ、星霜ハセラをいたリいて油ハシをしばりし百姓ハシ給金同様の役料ハシを取、我ハシ夫婦子供等迄安樂ハシにくらすからハシ、かゝる時より肉ハシをさき骨ハシを粉ハシにくだく共ちつ共いとハシぬ兼てかくびハシとハシ云もの、我ハシとても心よかゝる妻子の事案ハシじくらして一夜ハシさも目を合したる夜半ハシもあし、さへ去ハシあがら今更ハシ、命をおしみのめくハシと、遙隱れせハシ比興者ハシ、人の皮着ハシた畜生ハシと我ハシ耻ハシ斗ハシか憚ハシ迄後指ハシされふかと、夫ハシが不便ハシ可ハシ愛ハシさ故ハシすき好ハシんで此心勞ハシたがする物ハシを去迎ハシ推量ハシせよや女房ハシ、男泣ハシにぞ、泣ハシけるが、

心を沈涙を拂ひ、かくれたり誤つたり、國の爲又二ツよハ幾千万の其爲に、我身を捨ていつぞやより、鎌倉のかやしきへ、度々お願ひ申といへ共、上をへつらふ悪人有て、けふ迄空しく月日を送る、夫のみあらず僕人の原の計略に乘られて、無實の罪におめくと、命を捨んハ殘念あり、最早此上の管領家へ直訴の外思案なし、左有時に彌もつて、強訴の罪重けれ、妻子に迄も御とがめの、かゝるまい共計られず、夫故密に歸りしハ夫婦親子の縁を切、他人と成て事をはからば、いか成罪科に合迎も、そち達みハほかまひあく此家に疵付ねば、未來にござる舅渉へ、少しひは恩を報ずる理り、必恨と思はずに、我亡跡に子供が事、賴といふも胸せまり跡ハ詞も泣斗、始終聞居る女房ハ、うらめしそふみ夫の顔守り詰たる目に涙、たもちかねて聲を上わつと斗に叫び泣正軀、もあく見へけるが、漸に顔を上、最前も入譯を、無理といさらく思へね共夫婦ハ二世と有

物を夫のあんぐをよそに見て、命をぬしみのめくと存命そふあ私じやと、思ふてかいあ聞へませぬ、殊更三人四人迄子迄あしたる夫婦中、か前一人が男じやと世間の人にはめられて、跡々残りし女房子へ不心中者不孝者と、數多の人に笑ひして、それがお前の本望か、譬^{たとへ}未來のとゝ様に呵られても大事あい、夫に付が女房の役火の中、水の底迄もつれて行といへ云もせで、忌^{いさむ}へし此去狀、見るもうるさやけがらへし、とすゞに引きさき／＼狂氣の如く身をふるへしかづばとふして歎しひ、理りせて道理成、夫もひたんにくれけるが、今又初ぬうちが心底過分あざよ、嬉しいぞよ、此うへ思案を極め、片時も早く出立せん、伴共にも餘所あがら暇乞^{ひとまごひ}、四人とも小起しやれど、夫の詞に女房が、と返事^し仕あがらを、これが親と子別れかと思へばいと、立兼る心で心取直しやうやう子供の枕元、立寄べ兒惣平、おとあしく起^{おき}直り、父が前に手をつかへ

して待て居やうぞ、女房めでたふ門出の盃せん酒は有まい水成共と
いふに女房心得て、幸ひけふは神様へ夫の身の上子供等が行末頼む酒
神酒の余り、ちらり又有ふとかい立て、盃に乘たる銚子さかづき肴さかなひ
しこ取添そそて、夫の前にさし置くわ、めでたしく、サ女房つきやれ、アとこ
たへて銚子盃、手に取上あり上あがら、これが此世のわかれの盃、何にも知
ぬ子供等が跡でうろく、仕やらふと思へばいと、胸ふさがり、手をわ
あわあと、あるひ出す、赤練者あかねんしゃめと夫の目顔で呵かられて、心を沈しづめぐ酒
を、さらりと呑ので、ア惣平一ソウブ呑のみやれ、と差出せば手に受あがらなく
と、涙ぐめ、父お見咎ごがめ、ア門出を祝ふ盃を、何が不足で其はへ頬不吉千
万嗜なまめと、云れて惣平ソウブへおろく、聲こゑおとゝ様のお盃、有がたふござりま
すれど、ア鎌倉とやらへお越おほあされたら、いつお戻りあされふやら、ひよ
つとこれがお別れのお盃にあらふかと、それが悲しいくと、稚心わらわなの孝

行心母の驚き、扱ひそあたひ最前から夫婦の咄しを、寝た顔して聞
て居ました、やと、様、ふぞ涉用が濟だらば、私等を不便と思ふて、早ふ
戻つて下さりませ、頼みますと物數かずを、いへねど胸にはたとこたへ見
やれば、妻の身を背むけ、泣顔見せじと喰くばるかゝるけあげあ子を捨
て、何と命が捨られふ、笑へ笑へ親子連、いづく成共立退のふかゝり、今更よ
逃おち走らば、妻子まごよ迷ひし比ひ興おき者と我斗かたたかひ家の恥、未來の舅うぶへ云譯いわゆあし
と乱る、心押沈しづめ涙隱くらんでして、何を譯いわゆもあり、最前母に咄とつしたれ、アリヤ本の
轉ころペぬ先の杖といふ物氣づかいせまい、ハテ案じまいま、今度鎌倉へいた
らバナ、ヨリヤ馬うまに乘て鑓やりを突つくして戻らふぞと、子供すかしにいふ事も、心の
覺悟かくごぞ哀ある、さすが童わらべのあそあくも、そんあら嬉うれしうござります、そふ
して此盃わいふいたしませふ、シヤ弟共いとこへ順じゆよみ差召さしめれ、シヤおと、じや
と悦ぶ稚子わらな、三之助の母が持添涙隱して取納め、妻のお三の詞ことわを改かり、いつ

迄いふても盡せぬ名残去あがら、お前を始め残りの六人もし戻つても
居よふかと代官所へ入る大を入日毎々にきびしいをきんみ、夜明でハ證
あひ事、片時も早ふ出立、早ふくと急がせバ、健氣にもすたり、然ら
ば万事に氣を付て必留主を合點かゞ、其事ハ氣づかひ有、必妻子に引
されて仕そんじばし玄給ふあ、併大事の身をもつて暇乞に遠くと戻ら
しやんむた後心底ふ案じやと勵せバ、いふにや及ぶ我廻も其心底
を聞上り、後れり取ぬ氣づかひすあ、子供等達者で、女房さらばと立出れ
べと、様のふと志たふ子を心づよくもぶり拏び、見返りもせず二足三
足さずが恩愛ふりかゑり見れば見かへす妻や子が、とも様のふ我夫の
ふと呼聲に、とひふも胸せより、親子夫婦のうきわかれ天も哀み玉ひ
てや、又降しくる白雪に、見へつ隠れつちらくと瞬ばされし親鳥の行
るやみたる其風情、次第へに遠ざかる、初見へぬ迄延上り、父上のふと

兄弟が聲を限りよ泣叫へば三之助はうろく聲と様とこへ行ひや
つたばんも一所よ行たいとぐいんせあけれど爺親を去たふ有さまを
見る母が、こらへし滔涙わつと斗よ泣倒れ暫いらへもあかりじ
がく思へばくあぢきみや、二世とちぎりし我夫が命を捨に行旅路、我
半かへ子供等が一世のわかれの盃を嬉しそふあ顔をして酌する私が
心の内その様に有ふぞいあすだ其上にいつぞやる待てがれたる長の
留主、顔見て悦ぶ甲斐もあふ直に別るゝあぢきあさ、子供の愛に引され
てみれんあ心も出よふかと態と氣づよふ追立し、其時の悲しさを推量
じて下さんせいがにか國の爲じや逆我身を捨て殿様へ恐ろしい直訴
訟名主を云るゝ身の因果思へばく我より宿世いかある種をまき、夫
婦親子と生れ来てからうきめを見る事やと狂氣のとく取亂せば
子供も俱にすがり付一度よわつと聲立て歎く涙の下總の眞間の渡り

に浪として堤も、うがつ斗あり、いつの間にかへ最前と様子を聞たか喜
右衛門が、物陰と顯られ出アお尋者の惣五郎、其女房子が泣聲の合点行
ず親ひしに、妻子のしづに引されて戻りかつたに違ひあい、併内よりお
らぬ跡、今爰へくる道ですれ違ふたる旅姿、何でも惣五に極つた渡し場
迄へよも行まい、追付て一詮義とかけ出せば、お三へ取付シ待た、夫へ
大きあ人違、成程今宵こちの人戻られたがたつた今、伯父御坊にあひた
いと佛頂寺へ行れたと云せも果すアそこへく、そちらの事も有ふか
と寺へん兼て手先を付置スといひ、知せの相圖アいらざる問答する
中に取逃ハシガしてへ一大事、そこ退女め、イイイ夫のかへりに此三をしぶつ
てつれて行しやんせ、さもない中ホラへいつ迄も退ぬルと意地ばつたり、
めんどうあと踏飛せぞ、猶もさゝゆる其はづみ、臨坪ウラハシてうそ手練の當
うんと倒ハセる、其隙に、跡をも見ずしていつさんに飛が如くにかけり行

子供の始終うろくと母も取付縋り付かゝ様のふと口ぐに呼聲耳
に通じてやがて一聲息吹返しむつこと起てア悲しや少し成共隙入て
夫を首尾よふ落さんと思ふのかひあき女の身取逃せしかニ口をしや
と無念涙にくれけるが、かふしてハ居られぬ所、夫の身の上心元
あい私も跡から追付て、夫の先途を見届ん、そふじや、くとかいぐ
歎、脛もあらへに欠出せば、かゝ様ぞこへと稚子が、取付手先拂ひ退^{のけ}つい
戻つてくる其間、兄の役じや惣領殿、子供ねかしてよふ留主しや必門の
戸明まいぞと、跡にも心残れ共夫を思ふ一念力、かよひき足を踏しめく
跡をしたふて「たゞり行空も次第より更渡り、遠寺の鐘のこうく」といと
ぞ哀を添にけり、不便やあ惣五郎我身を捨て國民を救へんといふ大丈
夫も、さすが恩愛あいじやくに、引れて道もはかどらすたゞり、くて漸
と渡し場近く歩しが、雪もおやみて雲間^{あらは}顯れ、出る月かげは、晝を欺く

如く、惣五郎ハト心付ハア誠や今宵ハ師走十八日、下總一國手に取如く、あれか涉城下、これが在町ア森かげが我住家、これぞ此世の見納めと、思へばいと、胸ふさがり、暫し涙にくれけるが、今更に返らぬくり言、月代も傾けバ、鶴明も程近し、渡し守も待つらん、夜明ぬよ急がんと、足を早めて行先へ、思ひがけあき小影、顯れ出たる大の男、大道一ぱい大の字形、狼藉何やつと、笠の内も差覗けば、印幡沼の喜右衛門あり、南無三と、思へ共、今さらはづす道をあく、笠傾けて行過る、袖を扣へて、待た、岩橋村の名主殿、印幡沼の喜右衛門を、よも見忘れハさつしやるまいと、聲かけられて詮方なく、笠取退ていんぎんに、喜右衛門殿、悴めが急病故お醫者へ參る心せき、不禮の段ハ免有、と行んとするを猶引留マ、心せきかハ知ね共、こあんにちつと用もある、ハテ下に居て下さんせと、云れてせひもあま中にあら立てハあしかりあんと、心ゆるさず、扣れば喜右

衛門 態度を打とけて、^{イヤ}惣五郎殿、今度は領分の騒動々、鎌倉の後やしきへ
詣かけた一揆の奴原、召捕た其中に瀧澤村の六郎兵衛、小原村の半十郎
下勝田村の十右衛門、瀧野村の伊兵衛、千葉村忠藏、高野村の三郎兵衛、岩
橋村の惣五郎、^ヤ此七人の行衛が知ぬ草を分つて尋ね出せと、^{イヤ}殊の外
きびしい云付、爰であふたり百年め、繩打て代官所といふ筈あれ共、^{ハテ}か
よ成ぬ其先り、お互ひに知た、同士まんざら鬼にも成共あり、品によつた
ら見遁すまい物でもあい、^ヤ何と思ふて今比に、いづくをさして行んす
と態とやらで問かくる、心の底に一物の、有と見て取惣五郎、^{ヨレバ}渉深
切の段添い、^{イヤ}何を隠さふ、今度の騒動、元の發へふ代官様へ、二百廿九ヶ
村の名主共を召出され様とのに馳走を下され、其跡で、五ヶ年の間は年
貢二割ましのほあんだいそれからの大さりぎ、將門山へ寄合じやの、^{ヨリ}
印剣じやのと上を下、あちらからも惣五郎、^ヤこちらからも岩橋村の名

主殿と引よ引れぬ義理に成、あいもせぬちゑ袋をさか様よふるひ立、色
色いふても多勢に不勢、終にハ鎌倉のおやしきへ詰かけ、あげくの果に
ハ召とられ、其節せつハ我わ七人、淺草あさくさへ參詣して、戻て見れば右のしだら、聞
と其儘、皆こそくと逃仕度とうしどう、我等われらハ元より好まぬ事、嬉しやと立歸り、様
子を聞ば詮義最中、内にも居られず其儘に、出事しゆじハ出ても肌はださむく、行衛
定じょうぬ身のうへを哀かなと思ふて喜右衛門殿、見通みどりてたゞ情ぞと、有事あり事
取交きあて此場を無事に遁のがれんと、雪に額ひだをすり付て、頼む心ぞ、せつあけれ
喜右衛門ハ心中笑わらすまし顔で、惣五郎殿そうごろう、何といひんす、六人の名主
等らハ皆村々へ歸りしと、そろくと化の皮はがあらはれるひ、七人
の名主共、忍んで戻る事もやと、犬いぬを付置其うへに、最前貴様さいぜんの門口もんぐを通
りかゝりし内の様子、夜更て女の泣聲なきこゑ、合点行あてすと窺くわへべ、女房めがよ
まい言、管領家かんりょうへ直々に強訴がうその事をほざいたひやい、最前方さいぜんやからを入

たらしかくれと情強者、口利根に言廻し、此場をすいと抜ふと、扱もの
ぶとい土ほせりめ、人にこそよれ此喜右衛門が見付たから、一寸此場
へ遁しひせぬ、覺悟ひろげと呼へつたり、此うへへ絶肺絶命觀念せよ
と切付るを、身をかへして利腕つかみ回、名主殿味をやらるゝ
い、蛇や蛙を鉄先で、ころりとやるとへ當がちがふ、ちよこ才すあとね
ぢ合はづみ、拔身はるかに飛ちつたり、喜右衛門へやへらの手練、こあた
ハ義民の一念力、天も力を添ぬらん又ふり出す、雪風に、道のあやめも分
り兼組んづ轉んづ「いどみ合、いかゞへしけん物五郎つまづき轉ぶを飛
かゝり下に引敷、強氣の喜右衛門、刎起んとあせれ共力勝りに押へられ
無念涙にくれ居たる喜右衛門へ懷中の捕繩さがせを見へされば扱へ
今、の争ひに取落せしかと當惑の心、ゆるめべ起んとす、詮方あげれば聲
を上渡し守小番へ、曲者へとらへたぞ、繩もてこいと呼聲を、達はるか聞付

女房かさん、息をはかりに欠付てすかせべ夫の組敷れ既に危き有様を見る。何の用捨もあく、飛かゝつて喜右衛門が髻つかめば、ヨリヤ何ひろぐとふり返り、ヤアおのれハ惣五が女房か三、めんどうあと蹴飛せど、ひるまづ足にしかみ付其間に惣五郎起んとす、前後に歟を引受てさし者強氣の喜右衛門も持余して大音上^岡、ヤアお尋者の惣五郎を喜右衛門が生とつたぞ、小番のからぬか繩もてとい、早ふくといふ聲を、聞る甚平南無三と械引さげて走寄^透を見合せ、喜右衛門が脇坪^{わきひ}丁ど真の當うんと倒る、其隙に下る惣五郎刎かへし、互に顔を見合せて、女房かこちの人、甚平殿、先の御無事で、おまめでと、悦びあふこそ道理ある、お三の猶も夫向ひ、最前別れた其跡へ喜右衛門がきて様子を聞、何でもお前をとらへんと跡追てきた故ゆ、内に子共^{よる}留主^すとして、私も漸かけ付たに、危い所を甚平殿、よふ^マ助て下さんして、お禮^ハこうと伏拜む、甚平其手をぬし

分で、わつけもあり、こちらが爲にハ神様共、拜にやあらぬ。旦那様、せめての御恩報はさう。じよんぱう。そうと、最早夜明に間もあし、此様子でハ本海道かほだへ猶ぶつそう、船路ふなぢの足のつゝくだけ、此甚平が送つて進ぜふ、それハ御苦勞ごくろう。去あがら、年寄の氣きのそくと、いふよ甚平打わらひ、年寄たれども此親仁、一人前まへにまだ朝腹あさはらいらぬ。左んしやくあされずと、いざ召ませとす、むれバ妻のお三みに今更に又思ひ出すうき別れ、胸につまつておさらばの詞ことわも出ず目に涙なみだ、くくくハ果しあき、船と陸との暇乞、息吹かへす喜右衛門が惣五郎やらぬと飛込船、甚平心得械かいかいふり上、横に打込浪よこなみの底そこ、あれはかあき最期さいごをパ跡ぱせきに見捨て漕こ出す、女房さらばと一言毛けはるかに隔へだつ鎌倉へ腕うでにまかせて「行空こうくう」。

参内橋の段

我朝わせうの櫻木さくらぎハ見ぬ唐士からしの海棠かいたいにして花中はななかの王おうと賞ほじたり、されば仙家せんか

よもて遊ぶとかや木樹万草に至る迄心あらずば叶ふまじ草木もあび
く鎌倉山、足利管領元氏公此建長寺へ御佛參てん手にさげん取幕御門
前より幕拂灯、馳走のもり砂切水へ嚴重にこそ見へにけり掃除仕廻て
同宿珍念やうへ汗を押拭ひ嬉しやくこれであらかたれ片付だ
いかに師匠の云付じや連腕も腰も折る様あこれから我等も一休みと
帯かたげて行折から今朝ふる雨を其儘に蓑笠みのかさとひ奴の宅内出合頭
に同ア珍念か、おわれ僧そうのぶといやつ、爰であふたれ百年めじや先度く
ふた居酒屋のわりまい、今おこせくとむさぶり付を引ばづしじ
よこ才するあ奴おのしらさ、禪家の僧そう無一もつ、本來くふりあたりまへ祖師を
習ふて珍念も、お足がないとふりほゞくそふへさせんと宅内が蓑笠ぬ
ぎ捨つかみあふすりこぎ奴とみそすり坊主ぼうずすり抜く、遂行を門内さ
して遁てゆく、人目を忍び世を忍び一心こりし惣五郎漸よるこゝにいつき

せき門前近くにて、どうやらこふやら爰迄（あそ）へきたれ共見咎められて
一大事（ハテ）をふがもと思案の内見廻す傍（かた）又落たる蓑笠（みのささ）、これ究竟の隱
れがさ隠れ蓑迄添たるへ天の助か但し又佛神の加護成か、ハハ添やと
抑いたゞき勇す、んで出行向ふへ早行烈の御先ぶれ見付られじと身
縕（ゆき）ひ下る心も縁の端參内橋（そしん）のこあたる忍んで様子を窺ひ居る間近く
ひいく歩の聲對の先箱金紋（はこ）も先み立たる大鳥毛二階はぐまや投鞠（なげざる）
臺笠（だいがさ）たてがさ武士の表道具や鎧弓（かぎゆう）、次第くに込入く、御乗物を立さ
し置近習（きんじゅ）小性が取かこみ元氏公へゆふくと參内橋にさしかゝれば、
思ひがけあき橋下（はしお）、御願ひ申と差出す願書、近習小性御小人迄（さまでん）推參
成痕（せいこん）籍者引とらへて糺明と立さへぐ其隙に遙下（はるか）つて頭を下（お）、恐れ多く
も大君へ御願申此願書、天下の御法を背きし私御手向ひ仕らず併御
聞濟有迄（あそ）いちつ共此座へ動かじと思ひ込んだる其顔色、身をへりくだり

扣へ居る元氏公見やり給ひ、天晴成きやつが一言、鳥獸に至る迄、命を惜まぬ者もあきにかゝる大事を辨へあがら、身命を投打て願を出せし強訴の條、く、元氏得と聞届けたゞよ、ハット斗トドヌ惣五郎、天へも上る心地にて手のまひ足の踏途ふみもあく、有がた涙にくれ居たる御法の撻たたきと付々が詞に惣五郎わるびれず兩手を廻せば近習の武士早繩はやの取て高手小手元氏公の御聲高く、其科人にハ子細有館おさわらへ引と御上意にハッとこたへて侍中、君を守護してしづくと靈場れいじょうとして急がる、

詮義の段

浮世とい、誰いひ初し物やらん、直ある心一筋に生れたが罪鷦鷯筆鷹の羽強きどりもちも、届きかねるぞ力あき、比ひ、二月の未すいつかた御佛參の折からに外へハスと岩橋の、名主惣五郎眞斯からと願ひ出せし強訴の罪御聞濟めぐらに有あがら輕からざらん天下の撻本國佐倉へ引渡し、日のめさしぬ

牢屋敷決斷所にハ山住五平太さも押柄に扣へ居る所の百姓打連立、五人組を先に立御白洲に手をつかへゝく申上ます、私共ハ高津新田の五人組でござります、承りますれば、名主惣五郎殿、近い内、茨の臺にて、お仕置との喰村中の者が申まするハ、今城付二百廿九ヶ村か、安穩にくらしまするハ、皆惣五郎殿のふ影、もしお仕置に成ましてハ、氏神様へとふを濟ませぬ、其かへりに私共の役徳を差上ます、とふぞ惣五郎殿を、^間ふを助あされて下さりませ、と尻をつ立て願ひける、山住五平太聲あらゝげ役徳をさし上ると、アヨヤ元來役徳お取立の節、汝等一々承知仕あがら、鎌倉屋舗へ辭退するさへ憎き仕方と思ひの外、管領家へ直訴訟、其重罪の科によつて磔の刑に行ふ、武士たる者ハ申に及ばず、民に心を苦しめて重き罪を軽くするハ世の諺とハ申せ共々拔さしあらぬハお上の擬達て申せバ汝らも磔のお相伴だ叶ハぬ願ひ取置と、ちり灰つかぬ一

言にかへす詞も内義の科、せめて子供こどもの助すけを皆みな手てをすらねがへ
とも空うそふきし山住が、里の情も有あべこそ、そんあらたつた一言の暇ひま
乞こに只ただ一目ひとめ、そふぞあそぞあして下ささりませま。幾度いくどいふても叶かなへぬ、と呵わり
付つられ百姓共互まことにひに顔おほを見合あわせして、げふもむだ骨折ほねましたと、涙なみだすしつ
て立上たつり我家いえへ歸かりける、こあたの間まらしづくと、曲まがれる枝枝の杉すぎ
山彈さんじん正まさ殿でん、兼まて申合あわせせし大望だいぼうの一義いぎ、味方みがたの者ものへ申まことに及およばず吉良細川の
輩たぐい、大半味方だいはんみがたに付つましたかあ、ア其義そのぎいちつ共氣きづかひ有あ、カ心得ごこつ
がたきがたきの惣五郎そうごろうめ、先達せんたつて印幡いんぱんの喜右衛門きうゑもんよ、預よけ置おきたる臥龍ふのりゆうの笛笛正まさし
くさやつが奪だつひ取と隱かざしをるに相違さうりあし、私わたくしあらぬけふの役目がくもく、拷問ごもんに事
寄よ名笛なまつばの有家うけい云いす分別ぶべつ、必ひぬかるる五平太ごへいたと、しめし合あわせたる鰐わいと鱗うろこ、呑の込こ
顔おほの山住さんじゅが、ア者もの共とも高津新田たかつしんでん名主なぬしの惣五郎そうごろう、女房めいぼう駒こまよ至いたる迄まで尋問じもんべき子

細有殘らず是へ引すり出せと呼へれバヘットてたへて引出す余所の見る
めも不便あるかあ積りくる幾世の科を身に背負やせ、おどろへし惣五
郎一棟隔つ牢檻子の妻子の事へいかゞと案じ煩ふ夜の鶴引立られ
てぜひあくも、羊の歩みたゞくと、後につゝいて女房の、ふさんもとも
に禁しみの中に、いたいけ稚子も、何を科連引出され白洲の前にかし直
る、一目見るゝ爺親へ、無事で居たかと云たさも喰し、ばかり繩目もうるみ、
翌死る身も子を思ふ思ひの同じ女房が、逢たかつたと斗よて涙へ胸に
つゝかくる、それとへ知ぬ稚子へ、何のぐんせもすやく、顔、三人の子
供へ目をすりく、か、様寐むたい寐さしてと云にお三へたまり兼わ
つと斗ふ泣沈む耳にもかけず山住へ、權威を功に目をむき出し、惣五
郎、其方を呼出したへ、尋問べき一義有、真直に白狀せば、勘辨もいたして
くれん包に置いて、水責火責天秤せめ、背をたち割鉛の熱湯、流し込でも

云さにや置ぬときつは廻せべ頭を下ア、何事かへ存じませぬが済不審
のかゝつた事、存じました義でござらべ、何しに包隠しませふといふに
杉山聲やハらびヲ、よくいふた、ヨリヤ某が尋る子細へ去年真間の渡し場に
おいて、山住が下役印幡の喜右衛門を殺害せし其砌、彼が懷中に臥龍と
名号ヅケし、名笛メイヂを所持致したよ相違なし、其笛メイヂあんじ奪ひ取、いづくに隠し
置たるぞ、包ハシマまずかたれと姦佞のあまき詞にこらへぬ山住ナフ彈正殿
手ぬるし、タク惣五郎、名笛の有家早くぬかせとせり立れべア、思ひ
もよらぬおたづね、印幡の喜右衛門を殺しましたいに私あれ共
其名笛とやら臥龍とやらへ存じませぬ、ヨリヤ惣五郎、渡し守の甚兵衛へ
其夜ト逐電ハタハタいたし、行方知らずと聞及ぶされば喜右衛門を殺したい、甚
兵衛で有ふがある、是ハ又めいわく千万我科モガを人にぬつても輕カルふあるの
が今ハの當世、それに何ぞや人の科を引受る様な、惣五郎でもござりませ

ぬニヤぬかすあ、科もあき甚兵衛が、何故よ逃隠れいたず、臥龍の笛を奪ひ、
取立退しといふ事へ此彈正かゝみよかけてよく存じ罷有が所詮一應で、
ハぬかすまいよいく、女房悴に憂目を見せあべ、白狀するハ定の物、三
人のがきめらハ父親めと天秤責、又女房おさんハ見越の松へくまし上
ぶつてく白狀させよ、ナツト心得山住が、何の用捨もあら繩取ひらりと、こ
やす繩のはし松の梢に引上れべのふ情あや敷してたべ、我身斗か夫や、
子の責苦ハ何の因果ぞと、見やるこあたよ爺親が、我子をじつとしめ上
られ、身ふしくだくる血の涙とハめ兼るぞ哀れあり、彈正ハミタリ顔ヨリヤ
小悴共わりや何で泣ハ手がいたいか、ハハヨリヤ尤だハ、何と惣五郎是で
もまだぬかさぬか、まつすぐりに白狀せい、ニヤ知ぬ、存じませぬ、しぶとい
やつ、此上ハ次第ハにしめ上て、白狀サするサこたへて見よ、三人のがき
めらも、用捨致さずぶちすへよ、小駄めハ我傍モモへと、飽迄根づよき呵責の

せめ、マア、待てと寄添母親邪魔ひろぐふとけり飛し、結び合たる親子が
禁め阿鼻焦熱の目のあたりぞ、あぶあい、コレ必怪我してたもんあと、いへ
と其かひあく母親、我子も俱々打すへられ、アレいたい術あいわいのふと
親子が苦しみ見る爺、親涙と共に聲を上^{アゲ}、胴欲じやくくわいの尤
此身は科も有罪有バこそ責せつてふ、辨へ知ぬ子供等に、何科有て此責
苦、あんまりじやくくわいの、譬此身ハハツギ共。一分だめしにあ
ふ辻もみぢん毛頭恨ませぬ、どふぞお慈悲^ヒム子供等を、お助あされて下
さりませといふもせつあき苦痛の有さま、コレと、様、わしや何ばふく、
られても釣さげられても泣ハせぬ、じつと辛抱いたします、おまへは殿
様を頼んで堪忍してもらふて下さんせ、エ申殿様、私が體をおせめあさ
れて、と、様やか、様を、お赦しよされて下さりませ、コレ、お願ひ申ます、と
轉られた手を摺^{フリ}こすり泣顔隠す心根を、思ひやりつゝ、親々ハ正脉涙に

くれ居たる。こあたへ牛頭馬頭^{ウツモウ}、わり竹取^{サア}笛の有家を白狀せし。ぬかさぬか、ヤ云すばかうして云すると、目鼻も分すめつた打、母の心も消入思ひ氣へあせれ共手の叶はず、子へ絶かねる息の下^{アシ}、いたい術^{ヒツ}あいわいのふと、身もだへあがら道にも、兄の弟をかべへ共、弟の兄を打せじと、互に爭ふ眞實の心をさつし母の猶^チ、亥ゆつあい道理しやく、^モ親を大事とけあげにも、つらい責苦の辛抱する余尺もあい其からだ、何とそれがたまる物で、^モかへいやく、^モあ、^モ子供責るが悲しくば、臥龍の笛の白狀せいと、傍^キなる稚子踏^{ハタハタ}飛せば驚きあがらじだんだ踏^{ハタハタ}、^モ爰^ガ鬼よ蛇よ、かよひい子供をせめる手間で、^モ此母を殺さぬぞ、いつそ殺してくと身をもみあせれと目もかけず、骨も折よと打竹に、たまり兼て惣平^{ヨコハタ}ふせふ、くと、かけよらん、^モも盡あらず、引ばる繩も恨めしげよ。

ヨレナフ物平、くいのふと呼生る。母の心や通じてや。息吹かへし。目をひら
き、^同ヒカヽ様、^{ヒカヽ}の様にたゝかれても、わしや悲しうりあいけれど、喜八郎
や源助が手てがいたから悲しかる。ほんへ泣なみせぬ、悲しうも何共
あいかヽ様や、と、様が泣なみるので、ふやらほんも、泣なみたいと足すり
したるいじらしさ、聞母親の身も世もあられず、尤まことにじやくくわい
のふきのふまでもけさまでも、かふしたうきめに合ふと、夢ゆめにも知ぬ
稚子迄、むでいつれあい、とうよくあ、こんあせめ苦くるがいつの世に又あ
る事かと恨泣うめき。歎なげけば父も諸共に、取亂とりあしたる恩愛の涙なみへ遠近の谷間
にひゞく、瀧津瀬たきつせに雪解ゆきよ、そゞぐ如くあり、人の歎きも空吹風折そよごしき、告る
時計の七ツ、^調最早七ツ、今にも新吾めが來りあべ、何かのさまたげ事む
つかし、此間に一詮義さうぎ、糺明あらわさして云いしてくれん、と己おのがたくみの奥ふか
き溜りの間あいだ竹谷新吾、早番はやばんがハリの役目おとこめぞ、衣紋いもんつくろひ打通つなれば

はつと二人へ手持不沙汰、左あらぬ躰に座をもうけ、^ニ杉山氏、山住殿に
もほ苦勞、千万刻限來らば拙者が役目、そこ元方よハ済休足、然るべふ存
ると、禮義に有無の返答を、口へ出かねる武藏鎧^{さしゆよみ岡}アヘヤ此山住が仕かゝつた
彼等が詮義、いまだ白狀いたさねば暫くの間か扣へ下され、詮義とい
何の詮義^{サア}是ハア笛の^ヲ笛とい^{アヤサ}チ、そうちだ不易^{アキ}を調べる我等が役、
それゆへケ様にせんき仕ます、夫程の事に拷問とい余り御念が入過
る、假初にも天下の科人罪科極る惣五郎、たゞへ女房悴^{きがれ}にもせよ、もし落
命あざいたしあば、お上への申譯^ハ、何とせふと思ふてござる、^サそれれ
お役目相濟^{すむ}上からハ、彼等敵し召れよと、どこやら又がい挨拶^{あいさつ}に、じつと
目と目を見あへせて、手よ汗よぎり拳^{こぶし}をば、そつと袂^{たなび}へ押しかくし、ふせ
うぐに家來を呼出し^{シテ}科人めらを一々残らず獄屋へ引けと下知の
中、又引立る繩先の、細き心も芭蕉葉の、あしたの露と消る身の胸の思ひ

ハ幾千筋、あくく、別れ引れゆく、時しも門内騒しき、下れぐと下部が
權柄耳にをかけずゆうく、と入来る姿ハ墨染に、三衣の袈裟ハ結べ共
胸に、一物迎然和尙白洲にて、手をつかへ、拙僧事ハ、佛頂寺迎然とテ
者承へれば、此度惣五郎夫婦せがれ迄、仕置有とのうき、何卒彼等が
命乞、恐れあがら迎然がねがひ、聞届け下されあば、有がたくひと身を
へりくだり述ければ、竹谷新吾どりあへず、同貴僧は惣五郎が伯父佛頂
寺迎然よ、ヨリよく承へれ、大義を企徒黨いたし、強訴の科ハ重類ちうるいを絶す
拙沙門に入たる其方あれバ、格別の傍勘辨をもつて、おたりあきを有
がたいとハ思へず、命乞を願へばとて、傍聞濟有ふ様あし、早々立て歸ら
れよと、にべあき跡に猶もすり寄ハア、御尤ある傍仰、上を恐れぬ惣五郎、強
訴の科ハ是非に及ばず、併いかある科あり共十五才迄の子供に、傍仕
置あきと承れる、拙者へ下し給へらば、入門いたさせ出ハとあこ、惣五郎

夫婦が亡跡なきばたいのために致したしすべて人間生れてより、十五才迄
を幼よといふ、廿才までを少せといふ、三十才迄を若わざわざといふ、此理をもつて子
供の助命すけめい、ひとへと願奉る、と低頭平身詞てふそひしんをあがめ、思ひ入てぞ見へにけ
る、杉山彈正すぎやまだんじょうけしきを損そんじ間アいふむ迎然おどろかず、儕おなれが甥わらわの惣五郎そうごろうへ、恐れ多くも
管領家へ直訴訟じきそう、それゆへ鎌倉の屋舗やほに、お歴れき々の傍方わきがたも以ての外の
お呵いかり蒙かよひる重々ぢぢく憎にくき惣五郎、子供迎用捨あらぬ其方も似合たまはうたやうに
率持はからざて立退たたきだと、警けいの詞ことよくへつとせき上あ、舌した長ながく彈正だんじょう、無一物むいつぶつとゆせ共とも、
僧そうに、三衣さんいの徳とくも有あ、貴人きじんの高位こうぐいのくらいを恐おそれ、子供の命助めいすけたい斗とうに
一向願ひたすらふかひもあく、叶かなぬ上うに様さまの雜言ざげん、此上うへせひに及いたべず、亡語もうご
戒かたを破はり、五戒ごかいの内うちがかけるから、今より我わへ破戒はかの僧そう、此儘捺落まことにへ身
を沈ふみめ恨うらみをあさで置おきふかと、くへつと見ひらく眼中じゆゆうに、怒いのりの涙血なみだをそ
そき古木いのちの木の、元もと立たつよつて、我われと我われてに我われひたい、眉まゆ間まゆまつこううち付つくく。

血の瀧津瀬と流れ出、墨の衣も朱に染、左あがら悪氣の如くみて思ひ込んだる諸一念かつばと轉び息絶れば、人々是へと驚く中、あやしやかしこに數多の鼠彈正目かけ飛かゝるを心得ひらりと切拂へと、猶も寄くる。因果の端めぐりぐるく火の車惡の報の限あく後にぞ思ひ「知れたり

炎の臺の段

爰の所を下總の城下放れて程近き茨の臺蓮の臺頃も彌生の花見時樹の櫻を咲つれて雲に、見まがふ雪に降、まだ咲やらぬ谷々も有にかひあき惣五郎、女房子供諸共に情用捨もあらしこに引立られてせひあるも、最期場にぞ着けるが跡に付添諸見物今やくと待内に山住竹谷床几みかうり、惣五郎、其方義へ恐れ多くも、滌制禁をゆかし、剩へ印幡沼の喜右衛門を殺害し、其罪至つて輕からずとへナあがら、國中の百姓に成かへり、其身斗か妻子の命も、投出したる大丈夫の心底、武士も及ば

ぬ大義を企、是によつて新法浮年貢^{ハナツ}二割増の義の取置、以後上納へ先例の通り、城下在町商人共算露盤ばかり、或へ天秤棒杯の焼印料浮免の上右惡計企の輩^{ハシマガラ}、不殘鎌倉^{ハシマガラ}中屋敷に於て死罪定り萬民の悦び、國中安穩に成上へ、其方も本望で有ふどいへ法外成^{ハシマガラ}直訴、これ又憚り多き事みて、其罪甚だ重し、これによつて今日此所において悴共^{ハシマガラ}へ目の前みて死罪にいたし、汝等夫婦^{ハシマガラ}の格別のれんみんをもつて、牒申付る者へ、仰にはつと驚く女房、泣も泣れず今更に途方にくれて、居たりしが、涙あがら顔をあげ、夫を始め私^{ハシマガラ}、元^{ハシマガラ}覺悟の上あれバ、可愛や罪あき子供等に、何科有てぞうよくあ、余り非道^{ハシマガラ}御仕方^{ハシマガラ}たとへ我身^{ハシマガラ}の様あ、重き仕置にある迫も、子供の命^{ハシマガラ}お助けと返らぬ事をくぞき立頼む心ぞいたれしき、惣五郎も不便やと、思へとわざと聲をはげまし^{ハシマガラ}返らぬくり言、そも御直訴の始め^{ハシマガラ}、從類迄^{ハシマガラ}にたり有どい兼ていひ聞したであい

か此期に及び未練のはへづら比興者め、^{ハア}有がたき御仰國中御年貢
先例の通りと承られべ、惣五郎が身の面目、何しに違背仕りませふ。^{シタ}御
役人様へ末期の御ねがひ、御聞届け下さらば、有がたき仕合せと、願へと
傍^{ヨリ}から山住五平太^{ヤア}御聞あされ新吾殿引れ者の小哥とやらで、何を
ほさこふやら知ぬやつ、おかまひ有あ、といふを打消^{セテ}云れ山住殿、御
身へ搬使の役目あらずや、科人のさいべいへ此方の役、いらざるさし出
御無用く^{コリヤ}惣五郎、其方が願ひの筋によつてへ聞届くれん子細い
かにと有けれど、有がたき竹谷様のお詞、死罪極る惣五郎、願ふは比興
のやうあれど、今日成敗^{セハバ}の此子供等、私が目の前で殺されまして、^ハよみ
ぢのさへ是^モふも得浮みませぬ、何卒夫婦の者が相果^{ハセ}ましたる其跡で
いか成仕置にあふ逆を少しあらみは残りませぬ、是斗りがほ願ひと
今死る身も子を思ふ親へ人目もあら涙見る人とも袖玄ぼり哀ヌも又

不便く、山住五平太聲あらゝげア未練あり惣五郎、あんじがあした罪め
へに己を責る天の道、名主様の、庄屋様のと、もてかしづかれた汝等夫婦
其ぎは何だ、及びもせぬ大義を企^くてあまつさ歴^{れき}この役人へ過言をはいた罰
があたり、がき共迄が同じやうに木の空へ上ると、バカくしいせ
んさくだりい、さくさん、わりやよい男をもつて、子迄一所に殺すと
ハ、さぞ本望で有ふあと、あく迄るじる嘲^ち瞬^{しゆ}におさんかいとせき上で
モ、うらめしい其お詞、主ハ諸人に成^かなりほころうあされたかひ有て
百姓衆の悦びが夫婦の者のばだいにも、成て浮^{うき}みもせふけれど、ぐん
ぜもあり子をもぎとふみ切^{なき}も抜^{ぬき}か情^きあい、多くの人に底か^ひり、捨^する夫
婦の命よりいとし子迄がけふ爰^{さへ}で、消ると思へば今更にぞふ^アこれが
浮まれみ、お呵り請るか乞らね共わたしや子ゆへにまよひますと人目
も耻ずふし轉^{まわ}ぶ心を思ひやられたり、哀を余所に山住五平太竹谷殿^殿い

いざ知らず此度鎌倉の仰にへ物五郎が仕置の次第成丈重く取はからへ
と仰を請た此山住ミタマツとあた様でも。といつさまでも。ひき有てへお上
へ不忠よもや傍聞届けへ有まい。新吾殿シムコ、仰の如く鎌倉の嚴命強げ
れば、不便あからも物五郎、そちが願ひは叶ハシメぬ、と聞より五平太ゑせ笑
ひヒ。よいさまく。うぬが今見る國の前で、小びつちよめが細首ほそさか
へて打落す、眼をひらいて見物せよ。小びつちよめと抜かくる、刀の下
に手を合し、いたいけあ聲トノを上アツメテ申おとシ様、私へ先へ死まする、お前も早
ふきて下されや。喜八郎泣クモリすとじつとすへつて居や、常ニかニ様が
おつしやつたをよふ覺て居やらふぐや。おりや知て居る。此様シマツみ手
を合し、南無あみた佛アミタブといふので有ふがあと、いふに思はず。爺親アツメテへアツメテ。そ
ふじやく。それでこそ物五郎が伴チ出ハシメテかしたあア。ヤとシ様、わしや死で
あそぶの河原へ参ります。そいのかへらといふ所で石をひらふて横フカど

聞、一ヶ積さんでハ父のため、二ヶ積さんでハ母の爲、三ヶ積さんでハ兄弟や我身の爲
と積石を鬼きが來ふつてくだくげあ、ひよつと來たればおまへ呵しかつて下
されやと、いふに母親こらへ兼そなへ鬼きハめいを有ありとハ聞きと、現在げんざい目先めさきは居
る鬼や、八寒かんぢごくの氷の刃のしり、我身をつらぬく血の涙、必ず死しびてたもん
など母が歎かなけと爺親とうしん、わるびれもせずむんすと居直まっり、よいしく泣
あ女房伯父めのわらわ傍わきが命乞めう、それのみあらず村中から願ねがふても聞届きづけのあ
い佞人原潔いのうじんよ臨終りんじゆせふと、思おもへ共業きょうぎょう、惡非道おのびどう、杉山彈正すぎやまとんじょう、それよしたが
ふ獄卒ごくそくめら我相果あいがくし其跡そのあとで、惡念死靈しおりの鬼きと成恨なまくをはらさで置べきか、
ゴリヤ女房めのわらわも死しびる、子供等こどものだも成佛じやうぶつすよ、此ことも魂魄こんぱく此途このみちにととまつて、
思ひ忘わすらせん待まて居ゐよと、怒れる眼物めのものすゞく髮逆立かみさかだてし有あるまい、獅子怒しのぶ
神じんの如ごくにて、恐ろしくも又また、そさまじきさやか血迷ちめいふたか惣五郎そうごろう、此期このときに及
び何ほざく、觀念くわんひろいと、くたばりからふ。よく惣五郎そうごろうを磔磔の用意ようびく

と呼ひれバベットこたへて下部共、不便用捨を荒^{あら}こもの、上る丁を引立て、仕置の柱にしべり付^{サア}。これからががきどもの成敗^{せいかい}、先兄めからばらして、くれん者共其がきこれへ連來たれといふより早くぬきかざしはつしと大刀音惣平が首^の前へぞ落にけり。^{サア}ヨリヤ惣五郎、よく見たか、跡二人も此通りと切込^{いづ}稻妻稚子^{いなづま}へ不^ふ便といふもむざんあれ、^{サア}夫婦の者御仕置^{サア}女房めから、あぶり突にいたせと下知に立たがひ雜人共^{ぞうじん}、女房へくたべつたか、惣五郎へかゝれく、口でハ強氣^{がうき}に見ゆれども、^{タツタ}館^{やぐら}二本で往生^{じゆうじやう}といもろいやつだあるといふ聲聞より眼をいからし^{サア}おろかや山住五平太、おのれを始め杉山彈正、取り穢^{よご}さいで置べきかといふぞと見へしが一段の靈火^{れい}ひらめきし、あやし「おそろし」。

星田館の段

春の日の、長き浮世^{うきよ}に、短き^{あじ}、櫻の花のさかりとぞ、おじまる、こそ有^め

たき、日の本ちかき鎌倉に今又やまとさる星田の騒動、心も解ぬ雪の谷の
館に盡ぬしうねんの思ひつもりし上総之助、身又寒け立諸家中も心を
いためる斗あり、かゝる折から上総之助刀ふり上かけ出る。暫らくと
星田玄馬、やうくにかしとめ、何事の振舞、昨年國表において
惣五郎一家の者共、渉成敗の其日より異形の物が徘徊し、お心狂ひ乱心同
前、家中の者いすに及ばず、召つかひよ至る迄、心をくだく此有様、かゝ
る大事をじろじ召ん辨のあき殿にて、あらざりしが死靈奇病といひ
あがら淺ましき、此しだら渉心直し玉られと命かしまぬ諫言を耳に逆
ふる上総之助、いらざる諫言、無益の舌の根動さば、其座へ少しも立さじ
と、又ふり上る刀の下、かいく、つてしつかと受留はるかしさつて打守
り、あやみつかれし渉有様、お藥を持と呼へれば、と返事も船の早
瀬へ一間立出て、お藥と差出せば、取り茶碗の我あがら、一口呑べ心得

て早瀬の後、立廻り、背あでさする斗あり、少しひ心おさまりて上総之助の打點頭うちづき頭、思ひがけあき死靈の祟りの我あやより、したが是より所をかへ、機嫌直して一献汲ん、皆こ來たれと打つれて一間へこそい入よける、早暮、近き黄昏だそがれや、間毎にてらす燈火もげよ物すぞき、けしきえ、奥の間よりこしもと共、一つ所に寄集あつまり、初雪殿はつゆ、けふ玄馬様が大殿へわづつかへしこほ諫言かんげんお聞入きこいりが有たやら、今奥の間でお召つかひの早瀬様や、近習達を相手よ、涉酒宴しょくえんに仕好つかい其早瀬様と云へ、彈正様の娘涉故なまら殿様のおそばの役、涉酒宴の間に私等も氣ばらしせふじや有まいか、初雪殿の云通り、シタガ此間から涉殿の内へ大騒動、惣五郎の死靈とやらがあちらからいぼうともへ、こちらからもぬつと出、障子襖はたもめきくめき、こりやたまらぬと、人多くいはい惣五の、お化やと、上でも下でも森かじき、文字にいわつわりあかりけり、臺所の若君の花千代をいざあみて、も

とやかに出玉ひ^四、妬共、殿様にハ此程より、済心あらくしく、は近習小
性もめつたの済手討、これといふも惣五郎とやらの死靈の祟り、それゆ
へ鶴が岡神前にて、死靈解脫^{げだつ}の奉幣に、神をいさめる庭神樂其式^{しき}用る
家の重寶臥龍の笛、先達より紛失いたし、心をいためくらす内、自が状を
のかけ、死靈の祟りと驚きし。が、何者が持參せしやら、ふしきと手に入此
名笛、皆悦んでたもいのふと、仰に花千代かとあしふ^四、嬉しいく、是か
ら父上のお目えかゝり、此笛をさし上ふと、仰の詞にこしもと共悦びい
さむ折からに、こあたの間より上總之助、しとやかに出来給ひ^四、此程より
我奇病^{びやう}、嘸心勞^{そらう}に有ん、次へ立て休足仕やれど、鶴の一聲ぜひもあく、心を
跡に人ふへ一間の内へ入みけり、上總ハあたり打詠め、たそ茶を持^四、因場^四
と召るれバ^四、返事も長廊下^{らわ}、きてん天目眼八分茶道の因場へ立てて、ふ
づくがある拙者が手まく召ませと差出せば、上總ハじつと打詠め^四

ありや惣五郎が伯父の邈然よあく、いまだ汝ハテかまぬか彌陀の利鉢と
あさらめて、上總が大刀先身に請て佛果を得よと切付る、白刃をしづか
と諸手につかみ恨めしい上總殿、こなたの家來の惡事故、國中の民百姓
困窮飢死こんきゅう きしをさすまい爲、不便やあ惣五郎、度々願へと聞入ず、それのみあ
らず強訴の科をいひ立つみ、罪つみあき子供を殺したも、皆こあたのあすわざ故
と思へばく、恨めしい、俱に那落なげへつれ行ん、來たれやくといふ聲こゑ、
天地にひよき雷いかづちの頭上づじょうより落る心地して、かつばと轉ぶ上總之助、有し死
靈れいの雲霧きりの立し如くに、消けり、其物音に御臺ごだいのかけ出こぐ申我君様
御心體に浮持遊うきよばせ、此有様うりょうの何事と取付歎なげき、玉ふみぞ上總之助うへむ
つくと起おき、そちや、誰だじや、何者なじやと、いふ顔おほあがめて彌生みよの前まへ、其そのお心が
亂るゝも、死靈しれいとやらのあす業わざと、思おもへばほんに情じやうあい、晝夜つき添つきあふ
こしもと共の顔おほさへもお忘れあざるゝ此業病わざびやう、それゆへにこそ自じや、普

代の家來ハ明くれよ、祈らん神ハござりませぬ、其ハ佛や神様の、ハ利生
ハヘモ泣くらす、其和子一人か自の心を推して玉ハれど、裸や袂に取付
て、ハセいつ泣つ身を打ふし歎き玉ふぞ道理あり、只忙然たる上總之助
あたりをきつと打詠め詞、今のも夢で有つるか、ハチおそろしき愁念と見廻
す床の花生に、ふしきや入し櫻木よ、何國よりかハニ疋ひきの蛇、次第くに
近寄バ、上總之助ハ刀おつ取、あやしき蛇のふるまひと切ハ切程數まさ
る、百筋千すじ幾万疋せんじ、暫時の内に、殿も居間も蛇の地獄ぢごくも、かくやらん
ぞつとこひけの立臺、一間の内へ走り入、國の大變言上とかけ付來
たる山住五平太、上總が前に頭を下詞、當鎌倉ハいざしらず、お國やしきハ
蛇の住居、或ハ女の泣聲や、家中の者共狂氣の如く、我と我手に咽を突、或
ハ同士討いたすも有、余りの珍事やんじに侯故はせ、馳付しらせやさんと、息つきあ
へず言上すれば、上總之助ハ驚き給ひ、これも死靈しりやうのわざあるか、此上ハ

奇妙院へや付、加持祈禱かぢきとうをあすべし。といひ捨、一間へ入ければ、時にあや
しや稍すこに風あれ震動ぶんどうし、くへつともへ立、明火の煙、五平太見るより仰天
し、かくこへや思ろしや、いづくへ逃んも眞じんの闇、方角わからぬ死靈のわ
ぎ、山住さんじゆの只ただぼうせんとあきれ果たる其所へ、あらひれ出たる惣五そうごが姿
みゆゑうちめしや山住五平太、おのれも生てへ置べきか、とく惣五郎切きりへ
おのれも迷まよふたあ、よふもく我く親子、よふむごたらしい目めみあひ
せたあ、身共みきみへしらぬ彈正の言付ごんぶつだへや、いきやく彈正斗だいじょうとか五平太も
ともにあらくへ連れ行はなびらて恨うらみをはらさで置おきみか、身共みきみへしらぬ、ゆるせく
もわあ、き聲、逃出とうしゆつしても後髮引戻うしろかみされてたゞくく、わつと一聲山住
へ、後あとをも見ずして、逃歸とうきる、早暮過はるかて、初夜の鐘遠山寺に告渡つげる、こあたの
間よりしほくと、早瀬はやせのそつと立ててあたりうかひひとり言、此御
屋敷やしきへ上りしり、御主様ごしゆうじやうを毒害どくがいし、我大望おほのぞの力にあれど、そゝ様の仰ゆへ

來初た日お姿を見るに付てももつたいたいあい、殊にお家を押領とへ、おろしい工み事、言ん方あきうき身やとああたこあたを思ひやり、聲を立す忍び泣、折からこあたのしひぶきに、見咎められぬ其先にと小柴のかげに隠れ居る。こあたの方を杉山彈正、後につゝいて徳島勘解由、兩人座席に押直り、彈正殿、兼て望みの女龍の釣、手に入ましてござるかあ、コレ氣づかひ召るあ、御臺を始花千代め、我娘に申付、毒藥をもつて自滅の肺に取あす所有、女龍の釣へ我所持すれば、此上へ上總之助、今宵の内に術をもつて切腹さすれば我本望、必共々ぬかり召るあと、亥めし合して勘解由へ奥の一間へ入にけり、又もあやしき以前の蛇水鉢めがけて入よと見へしが、さつと吹くる風につれ、いんうんたる心火の光り、有しにかへらぬおさんが姿かげのごとにあらひるれべ、見るを彈正はつたとねめ付、汝の惣五が妻あらずや、おのれ大罪の科有て、御仕置受しを

無念に思ひ國へ元々鎌倉の御やしき迄さへがすへ重々につくき女め
と刀くつろげ誂寄れべ、いふあ彈正殿との間にハさらくうらみへあい、目
ざす歟ハ杉山彈正我々親子が非業ひきわざの死も皆かのれがあすわざと思へ
バくうらめしい今宵那落へ連て行ともようきめを見せてくれんと、
聞る彈正目に角立くわだてにつくき土民と切付れど死靈しれいのわざに身をから
まれ、身じん脉みゃく自由じゆゆうあらざれど雲を霞と切拂へばテツと一聲ごゑいかにと立寄
見れば我娘むすめきしもの彈正ため息つぎ、鞠あきれ果たまたる斗たたかい娘むすめ苦くるしき顔を
上申あがめと、様よう迎むかも叶かなぬああたの望神や佛の憎うらしみで思ひもよらず此
やうにああたの刀を身に受くるを、ふびんと恩し召あらば忠義を立る
とつゝ一言死る今端いまはに聞してと拜み廻れべ、入ざるくり言是迄汝を
入込せしハ我大望おほぼうの力にといひ付置しに此有様、かく迄仕込し我斗略さうりやく
空そらしく成も死靈のわざ思へばく口をしやあいで此上じょうへかき首と、奥

を目がけて立上るをくるしき中に引どりめ今を限りよ聲を上いかに
我慢^{我慢}につのるとてお家の恩^恩を請あがら押領^{押領}せんとの恐ろしい工み
事折^{事折}を見合しに意見^{意見}と思ふに甲斐^{甲斐}あき女の身、娘不便に思召^{お心}をひ
るがへし忠義^{忠義}を立て下さらば、三途^{三途}の川や死出^{死出}の山、それを頼みに行ま
すといふ聲次第によへり果^果無常の風と諸共^はかあく息^息いたへにけ
り、さすが我慢^{我慢}の彈正^{彈正}も、恩愛血すじにかられて、或ひ悔み或ひ怒
り拳^手を握^握る折からみ、こあたの方々星田玄馬^{星田玄馬}、彈正^{彈正}只今死靈の物語
りに汝^汝が惡事^ハ一々露顯^{露顯}、觀念^{觀念}せよと詰寄^バ、上総之助も立出給^ひ、汝
最前奥の間にて、われを討んとはかりし事、一間の内でうかゝひ聞奪ひ
取たる女龍の劍早く渡して切腹するか、サそれハ、但し繩かけ首討ふや
サ、ミと詰かけられ彈正無念の大聲上^上、口をしやあア我大望^{大望}のあらられ
し上ひ、せひに及ハぬ是迄と上總を目かげて切かれ、死靈の加勢^{加勢}よ

身をとぢられ、叶ひぬ所と彈正は、肩衣はねて我腹へ刀をかみと突立れば、
こあたの魂に惚五郎仕置のまゝ、又顯られ出、嬉しや本望や彈正始め
五平太も、今目前に亡る上へ、今々我ハ此世をさり、彌陀の蓮へ参るべし
いづれも様ふさらばと諸共、すがたへきへて失ければ、悪人退治の血
まつりと、首へ前にぞ落にけり、上總之助ハつゝ立上り、惡人亡びるうへ
からひ我を守護せし惚五郎、今より一つの宮を築き、かれが死靈を慰れ
ば、家長久ハ萬歳、今に花さく下總の星田の家へ榮へけり

嘉永六載癸丑九月發版

鐘の上野か
淺草か花雲佐倉曙終

明治廿六年一月 日印刷

明治廿六年一月 日出版

發行者兼
內藤加我

日本橋區通四丁目四番地

印刷者 灘川三代太郎

日本橋區新和泉町一番地

發兌金 櫻堂

日本橋區通四丁目四番地

佐倉曙

